令和４年度（2022 年度）文部科学省委託事業
学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業
「地域連携による障害者の生涯学習機会の拡大促進」

行政と大学の連携・協働を通じたインクルーシブ生涯学習プログラムの開発
－当事者が主体となって地域に働きかけ、交流や仲間づくりを推進するために－

目　次

ご挨拶　・・・・・・・・　１

実践報告　・・・・・・・・　２
・本プログラムの概要　・・・・・・・・　３
・生涯学習プログラムにおける
クローズドな講座（通称、ゼミ活動）　・・・・・・・・　８
・インクルーシブセミナー、インクルーシブメディア　・・・・・・・・　１６
・インクルーシブ・リサーチ　・・・・・・・・　２６
・令和４年度インクルーシブ・プログラム開発事業
連携協議会　・・・・・・・・　３６
・2022 年度インクルーシブ・プログラム開発事業総括　・・・・・・・・　４１
・市民への啓発（プレスリリース）　・・・・・・・・　４３
・学会・講演・出版物への掲載（2022 年度）　・・・・・・・・　４５

おわりに　・・・・・・・・　４８

ご挨拶

日頃から、相模女子大学・相模女子大学短期大学部の教育活動に対し、ご支援を賜りましてまことにありがとうございます。

相模原市と本学は、昨年度より文部科学省による「学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業」に協働で取り組んでまいりました。このたび、２年目となる令和４年度の成果を報告書という形にまとめてお目にかけることになりました。

多様性を包含した生涯教育の検討は、本学の社会貢献の一環としても大きな課題であり、その意味でも、この研究活動は本学にとっても重要な取り組みと考えております。このたびの研究成果を礎にして、持続可能な事業実施体制を構築し、さらなる生涯教育の充実をめざしてまいりますので、引き続きのご支援ご協力をよろしくお願い申し上げます。

末筆ではございますが、相模原市をはじめ、この実践研究に関わってくださったすべての方々に厚くお礼申し上げます。

令和５年２月

相　模　女　子　大　学
相模女子大学短期大学部　学長　　田畑　雅英

実践報告

本プログラムの概要

日戸由刈（相模女子大学　教員）

はじめに、相模原市の委託を受けて、2022 年度に相模女子大学で開発中の「インクルーシブ生涯学習プログラム」の概要を説明する。

前年度の取り組み

2021 年度より開発をスタートした本プログラムは、「インクルーシブ・セミナー」、「インクルーシブ・ゼミ」、「インクルーシブ・リサーチ」という 3 つのサブプログラムに分かれて、それぞれのチームが活動を展開してきた。

「インクルーシブ・セミナー」（セミナー）は相模原市発達障害支援センターの職員が企画・運営し、誰でも参加可能な市民セミナーとして講義中心に開催し、興味関心に合う講義を通して、発達障害や知的障害の若者と学生や市民との交流を促すことを図った。

「インクルーシブ・ゼミ」は 2019 年度から実施している大学のゼミと連動させたクローズな講座であり、自己理解の深化および相談の成功体験をねらいとする。2021 年度、メンバーはセミナーにも参加し、地域の発達障害や知的障害の若者と交流を持つことが出来た。

「インクルーシブ・リサーチ」は、大学の研究活動と連動させたクローズな教室であり、自身の関心を探求するための調査方法や社会への発信の方法を学ぶことによりセルフ・アドボカシーが可能になることをねらいとした。2021 年度は「私たちが学びたいと思う大学」をテーマに、発達障害や知的障害の若者が学生、大学教員等が協働して先駆的な実践を行う施設（神戸大学 KUPI プログラム、社会福祉法人創思苑パンジーメディアなど）を視察した。そこで学んだことや考えたことを、発達障害や知的障害の若者と学生がともに議論し、成果報告会で発表を行った。

以上の取り組みを報告書（「令和 3 年度（2021 年度）文部科学省委託事業 学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業（地域連携による障害者の生涯学習機会の拡大促進）：行政と大学の連携・協働を通じたインクルーシブ・プログラムの開発－当事者が主体となって地域に働きかけ、交流や仲間づくりを推進するために－」）としてまとめ、文部科学省の HP および本学の HP にて公開している。

今年度の計画とプログラムの概要

以上の取り組みを踏まえ、2022 年度は、先に述べた 3 つのプログラムの関係性を再整理し、1)他大学でも汎用可能な「インクルーシブ生涯学習プログラム」のモデル開発、および 2)プログラム運営に当事者の参加を図り、市内の知的障害や発達障害の高校生や若者に向けてプログラムの魅力を発信する技術や、活動を通じて参加者をサポートする心がまえを身につける「エンパワメント・プログラム」の実践、という 2 本柱で開発を進めた（図 1）。

インクルーシブ生涯学習プログラム（以下、生涯学習プログラム）では、前年度に開発したインクルーシブ・セミナーとインクルーシブ・ゼミを連動させ、秋学期に行う全 8 回の生涯学習プログラムとして再編成した。生涯学習プログラムの基盤は、これまでインクルーシブ・ゼミと称して開発してきた、固定メンバー対象の「クローズな講座」（以下、ゼミ活動）である。2022 年度は、前年度までのゼミ活動 5 回に特別授業を加えた全 6 回の前後に「入講式」と「修了式」を設定した（表 1）。

上記のプログラムでは、2022 年度より一連の時間割の中に「オープンなセミナー」（以下、セミナー）を 3 回組み込んだ。セミナーの時間帯は一般市民の他、知的障害や発達障害の高校生のターゲットにも積極的な参加呼びかけを図った。ゼミ活動の固定メンバーもセミナーに参加し、講義の聴講だけでなく、外部から参加した発達障害や知的障害の若者、一般の若者や学生・市民との交流機会を持つことができた。

セミナーの企画・運営にあたって、2022 年度は参加募集や毎回の出欠管理、学生や当事者で構成される運営スタッフの統括や相談に対応するための「専属コーディネーター」を配置した。また、運営にあたって相模女子大学生涯学修支援部門のスタッフ、講座の担当教員などが関わり、プログラム運営ミーティングを通して運営体制のモデル構築を図った。

図 1　2022 年度「インクルーシブ生涯学習プログラム」の概要

「エンパワメント・プログラム」は２つのチームに分かれて活動を行った。１つ目のチームでは、専属コーディネーターが中心となって、前年度までにゼミやリサーチの活動を経験した知的障害や発達障害の若者、本学の学生や卒業生が、生涯学習プログラムの準備や進行の補助などを有償で行う「メンター」活動、および県内の発達障害や知的障害の高校生や若者に向けて生涯学習プログラムの活動の魅力を You Tube などの媒体を用いて発信していく「メディア」活動を新たに開始した。メディアの活動にあたっては、プライバシー保護などメディア・リテラシーや記録・編集の技術、YouTube などの媒体への公開技術などの習得が必要であることから、2022 年度は専門技術スタッフによる指導の場を設けた。

２つ目のチームでは、前年度から開始した「インクルーシブ・リサーチ」（以下、リサーチ）の教員およびメンバーを中心に、「学校を卒業した後も学びを続ける」をテーマに、発達障害や知的障害の若者、学生や卒業生のニーズ調査を行った。

次頁より、「インクルーシブ生涯学習プログラム」の各サブプログラムについて、それぞれの担当者から 2022 年度の取り組みおよび成果と課題について報告する。

表1　2022 年度　クローズドな講座（通称、ゼミ活動）のスケジュールと活動内容

開始時間　前半：9 時集合 後半：11 時集合　第５回・第８回は 10 時集合 ／ 終了時間 12 時 30 分

第１回（9/24）	入講式（ガイダンス・自己紹介・メンターによるパーソナルポートフォリオの紹介）
第２回（10/1）	前半：好きなもの・興味のあるもの・得意なもの発表会 ／ 後半：セミナー参加（法律）
第３回(10/22)	前半：好きなもの・興味のあるもの・得意なもの発表会(続) ／ 後半：セミナー参加(心理学)
第４回（11/5）	「わたしのトリセツ相談会」1 回目
第５回(11/26)	ゴリさん(川口氏)の特別授業（子ども教育学科の「知的障害児の心理」の授業を聴講）
第６回(12/10)	前半：夢・なりたい職業 発表会 ／ 学生インタビュー ／ 後半：セミナー参加（哲学）
第７回（1/28）	「わたしのトリセツ相談会」2 回目【予定】
第８回（2/4）	修了式（受講証 授与）／ 午後の成果報告会に向けたメンバー同士での発表練習【予定】

※詳細は、次頁以降で述べる

資料１　ガイダンス配布物（全2枚）

2022年度
インクルーシブ
生涯学習プログラム

相模女子大学マスコットキャラクター さがっぱジョー

相模原市・相模女子大学

プログラムの説明

「インクルーシブ生涯学習プログラム」には

- 仕事にはなれたが人生をもっと豊かにしたいと思っている人
- 大学で学びたいと思っている人
- これから仕事につきたいと思っている人、など

いろいろな立場・経験の人同士が参加します。

活動には「ゼミ活動」と「セミナー」の2種類があります。

インクルーシブ生涯学習プログラム

ゼミ活動

リーダーは、ゴリさんです。
メンバーは、●働いている青年（勤労青年）6名
●相模女子大学の学生 4名 が受講生です。
みなさんの活動をサポートしてくれる「メンター」や「先輩」も参加します。
ゼミの活動では、パーソナルポートフォリオづくりや「私のトリセツ相談会」を行います。自分のこれからの人生（キャリア）について、したいこと、心配なこと、わかってほしいことなど、意見交換しましょう。

セミナー

司会進行は、武部さんです。
外部から参加した人たちと一緒に、専門家の講義を聞きます。　大学の授業の雰囲気を味わいましょう。
「『私の趣味』自慢タイム」、　ゴリさんの「就労ワンポイント講座」もあります。

活動スケジュール

	9:00正門集合	11:00	12:30終了 ※時間がのびる可能性があります。
第１回 9/24（土）	入講式	ゼミ活動	
第２回 10/1（土）	ゼミ活動	セミナー	
第３回 10/22（土）	ゼミ活動	セミナー	
第４回 11/5（土）	ゼミ活動（私のトリセツ相談会）		
第５回 11/26（土）	10:00正門集合	ゴリさんの大学の授業を見学する日	
第６回 12/10（土）	ゼミ活動	セミナー	
第７回 1/28（土）	ゼミ活動（私のトリセツ相談会）		
第８回 2/4（土）	10:00正門集合	ゼミ活動	修了式　午後は成果報告会があります。

参加のルール

- 遅刻や欠席をするときは、必ず連絡すること
- 終了時間が12時を過ぎます。家で朝食をとってくること
- 毎回、ゴリさんから宿題（課題）が出されます。わすれずにやってくること
- おたがいのプライバシーを大切にすること

持ち物

- □ さいふ・ハンカチ・スマホ
- □ 水筒かペットボトル（お茶など）
- □ 筆記用具
- □ プログラム・ファイル
- □ パーソナルポートフォリオ

【連絡先】
相模女子大学 日戸由刈
042−742−1411（代）　y−nitto@isc.sagami−wu.ac.jp

ゼミ活動について

（株）はまりハ　川口信雄

ゼミ活動のねらい

①自分を知り、自己理解を深めるために
　パーソナルポートフォリオを制作する

②心を開いて自分について語る

③自分の悩みや困りごとについて相談し、
　お互いにアドバイスする

パーソナルポートフォリオとは

・自分のプロフィール、学び、経験し、身に付けてきたことなどを１冊のクリアファイルにまとめたもの

パーソナルポートフォリの内容

①　好きなもの・興味のあるもの
②　得意なもの・資格や表彰
③　自分のトリセツ
　　自分の特性と困りごとについて、周囲に説明し、職場でできる具体的な対策ついて相談するために使う
④　夢・なりたい職業

わたしのトリセツ

③　わたしのトリセツ		氏名	年月日
現在あるいは将来に、職場や生活で困りそうな場面と困りごとについて			
どんな場面であるか	具体的にどんなことに困っているか	自分にできる対策	周囲にお願いしたいこと
①			
②			

次回（10/１）の予告

好きなこと・得意なことプレゼン

「好きなもの・興味のあるもの・得意なものなど」について、ポートフォリオを見せながらプレゼンする。１人5分以内

発表者：

※毎回の「ゼミのふり返り」はメールに直接記入し、日戸先生に送る。その日のうちにお願いします。

生涯学習プログラムにおけるクローズドな講座（通称、ゼミ活動）

日戸由刈（相模女子大学　教員）

ゼミ活動の構成メンバー

生涯学習プログラムの基盤はこれまでインクルーシブ・ゼミと称して開発してきた「クローズな講座」（以下、ゼミ活動）である。2022 年度の参加者は 10 名、内訳は特別支援学校高等部を卒業し障害者雇用枠で働く知的障害や発達障害の青年 6 名（男性 2 名・女性 4 名；以下、勤労青年）、日戸ゼミの学生 4 名（全員女性；3 年生 3 名、4 年生 1 名）であった。

参加者のリクルート方法について、前年度当初の計画では、相模原市発達障害支援センターが主催するインクルーシブ・セミナーのリピーター参加者を対象に広く募集を行う計画であった。しかしコロナ感染拡大が収束せず 2021 年度のセミナーが全回オンライン開催となったため、次年度のゼミ参加を募ることができなかった。このため、前年度のゼミ担当であった川口信雄氏（株式会社はまりハ）のご尽力により、川口氏の前の職場である横浜市立若葉台特別支援学校（以下、横浜わかば学園）の卒業生に参加を呼びかけ、4 名の新規メンバーを募った。加えて、前年度の参加者のうち仕事の都合などの理由で十分な交流機会を持てなかった勤労青年 2 名にも参加を呼びかけた。

指導者は、前年度から引き続き、相模女子大学教員の日戸と川口氏が担当した。また、毎回ではないが、メンター役が参加した。メンター役は、前年度までにインクルーシブ・ゼミを体験した者の中から、今後も本プログラムへの関与を続けたいという意思表示のあった勤労青年 2 名、学生（4 年生）1 名・卒業生 1 名に依頼した。このうち勤労青年の岩本健吾氏、今藤孝拓氏は、本事業の連携協議会においても 2022 年度より「研究開発協力者」という肩書で委員に就任し、川口氏とともに本プログラムの開発に寄与している。

ゼミ活動のねらい

ゼミ活動のねらいは、メンバーへのガイダンスにおいて次の 3 点であると参加者に伝えた。1.自分を知り自己理解を深めるためにパーソナルポートフォリオを制作する。2.心を開いて自分について語る。3.自分の悩みや困りごとについて相談し、お互いにアドバイスする。この 3 点をねらいとした理由について、川口氏はメンバーに向けて次のように述べている。

せっかく就職できても、様々な問題に直面して心が折れてしまい、立ち直れないでいる若者が少なくありません。社会の中で心が折れないためには「困った時に相談できる」かがポイントです。相談するためには「自分を知る」必要があります。

そこで、インクルーシブ・ゼミではパーソナルポートフォリオ作りを通して、自分を多面的に見つめます。自己理解は自分を見つめるだけでは深まりにくいので、ゼミ仲間との対話の中から自分を発見してください。また、自分のことを心を開いて語る経験にも挑戦しよう。

パーソナルポートフォリオとは、自分のプロフィール、学び経験し身に付けてきたことなどを１冊のクリアファイルにまとめたものである。その制作過程で対話の中から自分を発見すると共に自己開示の経験も積むことができると考えている。本プログラムで使用するパーソナルポートフォリオの内容は、川口氏の発案により、①好きなもの・興味のあるもの、②得意なもの・資格や表彰、③わたしのトリセツ（自分の困りごとと対処方法）、④夢・なりたい職業、とした。そして①②④は発表会形式で各自が開示し、③は「わたしのトリセツ相談会」（以下、トリセツ相談会）で使用した。詳細は後に述べる。

以上の通り、本プログラムは「パーソナルポートフォリオの発表会やトリセツ相談会という構造化された活動」という方法論によって、「参加する勤労青年、学生が対等な関係性のもと自己理解を深化させ、自己開示し、相談の成功体験を持つこと」をねらいとしている。これら基本的な方法論・ねらいは 2019 年の開始時より一貫しており、毎年の試行錯誤とふり返りを通じて支援技法や教材が洗練され、汎用しやすいプログラムが確立しつつある。

各フェイズでの取り組みと参加者の反応

ゼミ活動の全 8 回のスケジュールと活動内容は、先に示した表１の通りである。第 1 回の入構式では、メンバーをひとりずつ紹介し、生涯学習プログラムの概要やゼミ活動のねらいに関する配布物（資料 1）を挟んだクリアファイルを贈呈した。そして今後のゼミ活動で配布する資料はすべてここに挟むように伝えた。

全 8 回の流れをメンバーの視点に立って整理すると、次の 3 つのフェイズがあったと考えられる。第 1 回から第 3 回：様子見のフェイズ、第 4 回から第 6 回：自分を見つめるフェイズ、第 7 回から第 8 回：今後の関係性について考えるフェイズ。各フェイズでの取り組みと参加者の反応を述べる。

１）第 1 回から第 3 回：様子見のフェイズ

第 3 回までの活動では、指導者はメンバー同士が「お互いを知り、親しむ」ために、「トーキングカード」を使った自己紹介やパーソナルポートフォリオの発表会など、指導者主導による構造化された課題場面を設定した。このフェイズでのメンバーのふり返りを見ると、互いに距離を図りながら、少しずつ接近しようとする様子がうかがえる。

「ゼミのパーソナルポートフォリオでは、皆さんと好きな物や自分ことを話をしたり、質問たくさんして、交流ができて嬉しかったです。ここは否定されずに聞いてもらえるので、安心して参加できます。課題は、皆さんに質問しているときに、自分のことを返事しないように気をつけます。皆さんの返事も聞けるように気をつけます。次回も楽しくやりたいと思います。」(勤労青年 A・男性)

「他の人のポートフォリオの発表を聞いたり、交流会でのポートフォリオの見せ合いの中で、自分との共通点を見つける事ができてそこから会話が弾んで少し皆さんと仲良くできたと思

います。次回もみなさんとたくさんお話できたら良いなと思います。」(勤労青年 B・女性)

「お会いするのが 2 回目の方が多かったので、前回よりも心構えが出来た様に思いました。皆さんのポートフォリオの発表は、私と同じ好きなものをより深く解説して下さる方や初めて知った事をお話しして下さる方もいらっしゃってとても勉強にもなりましたし、個人の事も一部ですが知れて嬉しく思いました。」(学生 G)

「パーソナルポートフォリオはそれぞれの個性が溢れていて面白かったですが、いざ質問するとなると、どうしても躊躇してしまう自分がいました。しかし、みなさんがちょっとした感想や自分の体験談などもどんどん発言されている姿を見て、もっと気軽に思ったことを伝えていいんだ!と気が付きました。それからは何度か手を上げることができました。実際に自分の発表の内容について質問や感想をもらえるととても嬉しかったです。次回はもっと積極的に感想を伝えられるようにしたいと思います。」(学生 H)

２）第 4 回から第 6 回：自分を見つめるフェイズ

第 4 回では午前中にかけてトリセツ相談会を行った。メンバーは勤労青年 3 名、学生 2 名で構成される 2 グループに分かれ、各グループにメンター役の勤労青年 1 名、学生または卒業生 1 名が参加した。

各グループでは、メンバーの学生が司会役を任された。学生の進行に沿ってメンバーが順番に、事前に用意してきた「わたしのトリセツ」シートの内容を発表すると、メンター役の学生／卒業生はホワイトボードに要点を板書していった。発表内容について司会役が他のメンバーに意見や助言を求めると、メンター役の勤労青年や昨年度も参加したメンバーが口火を切り、新規メンバーもその様子を見て次第に発言するようになった。

指導者は、事前にメンバーの特性を考慮してグルーピングを行い、ゼミ活動の開始前にメンター役や司会役と打ち合わせを行った後、トリセツ相談会の最中はやりとりにほとんど関与せず見守り役に徹した。メンター役の学生・卒業生に対しても、やりとりには関与せず板書に専念するようにと、事前の打ち合わせで伝えた。

知的障害や発達障害の人たちの多くは、複数の人物の間で口頭のみで交わされる会話が苦手である。しかし、板書による「会話の見える化」という配慮を行ったことで、彼らは学生と同程度に会話の内容や文脈を把握し、対等な関係性でやりとりに参加することができた様子が、勤労青年メンバーのふり返りからうかがわれる。

「ここでしか言えないことを発表して様々な仲間の意見も聞けていろんな解決方法ができ良かったです。これからの仕事に繋げていくためにはどうしたらいいのか自分だけではなく相手側に相談して決めることも解りました。楽しい経験ができ良かったです。」(勤労青年 C・女性)

「今日はトリセツ相談会でみなさんから良いアドバイスを貰って僕もその気持ちになり自分でもこの調子で出来るんじゃないかって思ってその気になりました。」(勤労青年 D・男性)

「今日は分からないこと,困ったことを相談できました。大学の皆さんも相談に乗ってくれて

ありがとうございました。また相談できる時があったら私はやりたいと思っています。」(勤労青年 E・女性)

「今回のトリセツ会では、自分の悩みについて様々な意見を頂きました。その意見から自分でもできそうなことから始めていこうと思います。」(勤労青年 F・女性)

以上のふり返りから、勤労青年メンバーの多くが人生で初めて特別支援学校以外の同世代の人たちに向けて自分の困りごとを打ち明け、満足する結果を得ることができたようである。また、自分を見つめるという行為は、苦手や失敗を反省する場面、回避したい気持ちを奮い立たせる場面において、周囲から促されて取り組む場合が少なくない。しかし、今回「楽しい経験ができ良かった」「その気になった」「またやりたいと思った」と書かれていたように、彼らは同世代との対等な関係性での気軽で楽しい会話によって、苦手や失敗があっても自分自身を肯定的に捉えることができたのではないかと考えられる。

一方、学生メンバーのふり返りを見ると、「始まる前は正直不安な気持ち」であったが、トリセツ相談会を通じて勤労青年に対する新たな発見や気づきがあり、最後は「本当に参加して良かった」と思えるに至った様子がうかがえる。

「最初は控えめでしたが、相談を進めるうちに皆さんどんどん積極的に意見を言ってくださるようになり、とても盛り上がったと思います。最後の方は相談内容から色々な話に広がり、雑談としても楽しかったです。他の人でも私と同じ悩みを感じているんだと分かるだけでも、とても心が軽くなりました。自分では思いつかなかった対策を知ることができたので、これからぜひ実践しようと思います。始まる前は正直不安な気持ちでしたが、本当に参加して良かったです!」(学生 H)

「今回の相談会では、この悩みを持っているのが自分だけではないと分かりとても安心しました。また、皆さんから自分とは違う目線でアドバイスや共感の言葉を頂いたので新たな視点が得られましたし、頂いたアドバイスをもとに実践してみようと思いました。また、相談を通して皆さんの個性や考え方を知れた事がとても嬉しかったです。」(学生 G)

このフェイズに至るまで、学生たちは勤労青年に対して無意識にスティグマを抱き、相談会への参加に不安を感じていたのかもしれない。しかし、やりとりを通して勤労青年に対して「悩みが自分と同じである」と気づく一方、社会人経験にもとづく「自分たちにはない視点」を持つことをも発見し、彼らに対する認識が大きく変化したのではないかと考えられる。

実際、第 6 回のゼミ活動開始前、学生メンバーは「この活動をまとめるにあたって、勤労青年メンバーの感想を聴取する時間がほしい」と指導者に相談しに来た。そこで当初の計画を変更し、急遽「学生インタビュー」の時間を設けた。そして、指導者はやりとりに関与せず、学生メンバー主導によるグループ・インタビューが楽しそうな雰囲気の中で実施された。インタビューの結果を反映させて 3 年生 3 名が作成したスライドを資料 2 に示す。

3）第 7 回から第 8 回：今後の関係性について考えるフェイズ

学生が勤労青年へのインタビュー結果をもとに作成したスライド（資料 2）から、2022 年度のゼミ活動に参加したメンバーの多くが「参加して良かった」と感じており、今後メンバー同士で「敬語や敬称を使わない、よそよそしさのない」、「自然に助け合えるような」親密な関係性を築き、今後もその関係を続けていきたいと望んでいることが明らかとなった。

一方、学生メンバーは勤労青年に対する認識の変化を通じて、新たな気づきを持ち、問題意識に発展させ始めている。気づきのひとつは勤労青年にみられる過剰適応の傾向、もうひとつは自分自身の中にもある「無意識な上下関係」、すなわちスティグマの存在である。

「勤労青年の方が『しつこいと嫌われるんですって』と言っていた。なぜ嫌われてしまうのかは理解していないが、社会に馴染めなくなってしまうからなるべく抑えるようにしているそうだった。現代社会に馴染めるようにと、『型にはめ込まれた』とも捉えられるのでは」(学生 I)

「過去の障害児との関りから、接する際の心構えを学ぶつもりでゼミに参加していた。しかし、話しかけ方や話題など普段の対人関係と変わらなかった」(学生 G)

本稿の執筆が第 6 回と第 7 回の間になされたため、これらの問題意識を持ち始めた学生メンバーがその後どのように考え行動したかは、別の機会に報告したい。

インクルーシブ生涯学習プログラム全体におけるゼミ活動の意義と今後の課題

以上より、生涯学習プログラムにおけるゼミ活動の意義をまとめる。当事者が主体的に活動し、精神的に成長する過程において、ゼミ活動は「指導者主導による構造化された小集団場面において、固定のメンバー同士での対等なやりとりの成功体験とふり返りの機会を積み重ねるステップ」として機能していたと考えられる。そして、メンバーの多くはこのステップにとどまろうとはせず、指導者の関与を相対的に減らし「勤労青年と学生による新たな協働関係を構築する」という次のステップに進むことを望むように認識が変化している。

次頁以降に述べるメンター活動やメディア活動、リサーチ活動に参加する勤労青年メンバー全員が、前年度までにゼミ活動を経験し、現在は知的障害や発達障害の仲間たちをエンパワメントする側に移行している。2022 年度のメンバーも、多くが次年度も本プログラムへの関与を続けたいと希望している。今後の彼らの活躍と成長を注視したい。

最後に、今年度のゼミ活動の課題は次の 2 点と考えられる。1 点目に、参加者のリクルート方法が確立していない。本プログラムは相模原市の陽光園や発達障害支援センターとの連携・協働による開発であることから、市にはより広報活動や広域の関係行政機関とのネットワークづくりなど行政の強みを生かした展開を期待したい。2 点目に、参加した勤労青年メンバーには自己マネージメントを苦手とする者が少なくなく、2022 年度のゼミ活動では毎回、事前のリマインダー・メールが欠かせなかった。今後、この弱点を補強するために、保護者や介護者との連携・協力体制を構築するための仕組みをプログラムの中に組み込む工夫が必要と考えられる（入講式・修了式に保護者・介護者を招待するなど）。

資料２　学生が作成したスライド

インクルーシブゼミ
活動報告

相模女子大学三年生

インテグレーションとインクルーシブの違い

・インテグレーション/integration

障害のない「多数派」の人たちが中心の環境に、障害のある人を適応させようとする考え方

➡場を統合することばかりを重視し、必要な合理的配慮や環境整備がされなかった
➡障害のある人が、ただ同じ場に放り込まれる（ダンピング）状態

・インクルーシブ/inclusive

すべての人々がその人らしい性格・興味・能力・困りごとを持っていることを前提とし、誰もが平等に参加できるために、必要に応じて個別的な配慮を行うという考え方

パーソナルポートフォリオを行った感想

・お互いの共通点や意外な一面を知ることをきっかけに、
交流が生まれて嬉しかった
・自分が今まで頑張ってきたことを振り返ることで、自信に繋がった
・好きなものをみんなに受け入れてもらえることの喜びを体感できた
・否定されずに聞いてもらえることで、安心して自己開示できた
・自分との共通点を見つけることができて、会話が弾み、
仲良くなるきっかけになった
・好きなものの話をする皆がキラキラしていて素敵だった

インクルーシブゼミについて

・インクルーシブゼミとは？
知的障害や発達障害をもつ就労している勤労青年と大学生が
同じ『学生仲間』として一緒に学び、交流を楽しむプログラム

・活動場所：相模女子大学キャンパス

・活動期間：2022年9月～2023年1月　全8回

参加メンバー

・川口信雄さん（（株）はまりハ顧問、元横浜わかば学園進路専任）
・日戸由刈教授（相模女子大学　人間社会学部教授）

・勤労青年（横浜わかば学園卒業生）　6名
・相模女子大学　学生 4名

・メンター（横浜わかば学園卒業生、相模女子大学卒業生）

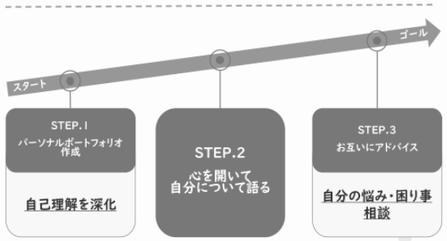
わたしのトリセツ相談会

メイン
プログラム

・わたしのトリセツ相談会とは？
自分がいま困っていること、将来困りそうなことを
みんなに相談する会
・自分にできる対策、周囲にお願いしたいこと、
みんなの体験談などから意見を出し合う

悩み事：黒字
意見・アドバイス：青字
自分の感想：赤字

インクルーシブゼミの目標



パーソナルポートフォリオ

・パーソナルポートフォリオとは？
自分の好きなもの、興味のあるもの、保持資格、夢
なりたい職業などを１冊のファイルにまとめたもの

発表中の様子

わたしのトリセツ相談会を行った感想

・トリセツ相談会を通して、困った時に相談をする力を学べた
・悩みを相談することは勇気がいることだったが、
悩みについてみんなで考えるというとても濃い時間を過ごせた
・実際に声に出して打ち明けてみると、
「大したこと無かったな」「みんな同じなんだな」と気が付き、勇気が出た
・新しい視点から悩み事を捉えることができ、新たな解決法を
見つけることが出来た
・共感できる話が多く親近感がわき、困りごとを丁寧に
聞いてもらえたことが嬉しかった

インクルーシブ・セミナー

・全3回：法律、心理学、哲学の先生の講義を受講
・ゼミメンバーだけでなく、さまざまな世代の市民の方も参加
・年齢も、ハンディキャップの有無も関係なく、より開かれた空間で
大学の授業の雰囲気を体験

セミナーの後は
「私の趣味自慢タイム！」
自分の趣味を
実物を見せながら
みんなの前で発表

インクルーシブ・セミナーに参加した感想

・心理学の講義で習った怒りをコントロールする瞑想を実践している
・回を重ねるごとに「私の趣味自慢タイム！」で披露する人が増えた

・心理学の講義を担当した先生からのコメント・・・

『大学生は「間違ったことをいわないようにしよう」、「目立ちたくない」などの不安が強い。勤労青年の方々はそのような不安が少なく、むしろ正直なので、風通しが良く、存在感があり、生命のエネルギーがある』

さまざまな人が共に学ぶ、インクルーシブセミナーならではのメリットと言える

目標達成度

STEP.1	STEP.2	STEP.3
パーソナルポートフォリオ作成	心を開いて自分について語る	お互いにアドバイス
CLEAR	CLEAR	CLEAR
自己を振り返り自己理解を深めることができた自信をつけられた	安心して自己開示相談する力を学んだ親近感がわき交流が生まれた	新たな解決法を発見「みんな同じなのだ」と勇気が出た

全体を通して良かったこと

・同世代とのコミュニケーションをとることで職場とも家族とも違う、新しい人間関係を築けた
・大人数の前で話すこと、人の話を聞くこと、共感することが苦手だったができるようになった
・自分のことを否定せず聞いてもらえる安心感から自信をもつことができた
・対面で人と会えることや、直接言葉のキャッチボールができることが嬉しい
・以前は、行動する前に無理と諦めていたが、今は行動を起こせるようになった
・ゼミに参加する前は基本的には引きこもりだったが、ゼミに参加することで外に出る機会が増えた

自己理解・他者理解・自己受容・相談力を育むことが出来た

「もっと〇〇！」集

・もっと趣味やありのままの自分を出したい！
・活動内容によって時間制限があるが、自分が話をできる場だから
もっと話をしたい！
・特定の人に偏りがちだから、もっと色んな人とコミュニケーションを取りたい！
・ゼミが終わったら会える機会が無くなるのは寂しい！また、機会がほしい！
・今は、敬語や敬称がついていてよそよそしい…もっとフレンドリーに話しやすい環境が良い！

今後の活動に向けて願う事

・構造化された活動＋αで活動を行いたい！
決められたプログラムだけでなく、参加者たちのやりたいことを行う
例：自由に会話できる時間を増加
➡お互いを知る時間が増加し、学生と勤労青年との仲を更に深める
ことができるのではないか
・回数を増やしてほしい！
➡単純にみんなと会える機会がもっと欲しい

個人感想　-学生H-

◎学んだこと
「支援したい」「助けてあげたい」＝一方的？自己満足？
➡このゼミにおいて、一方的に助けることは対等な関係性とは言えない

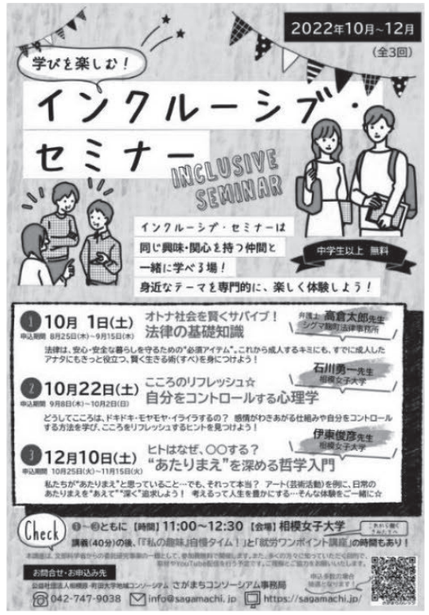
・人見知りで緊張していたときに話しかけてくれた
・トリセツ相談会で慣れない司会をしたときには、場を盛り上げて暖かい雰囲気にしてくれた
↳みんなに助けてもらった場面がたくさんある
逆に、作業について分からないことがあったときは教えることが出来た

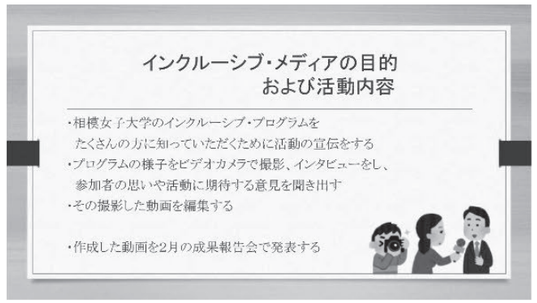
大切なのは、一方的に助けることではなく、自然に助け合うこと

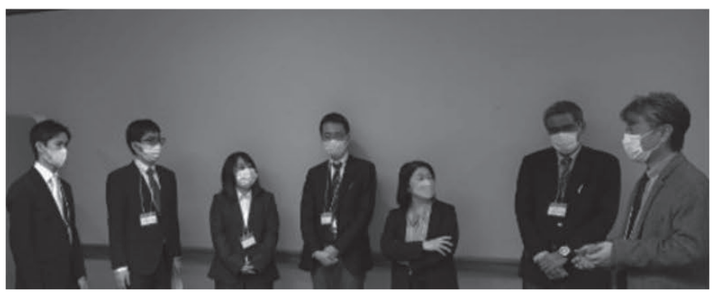
◎課題
「インクルーシブな社会」を目指す中で、無意識的な上下関係をなくすこと

インクルーシブセミナー、インクルーシブメディア

武部正明（コーディネーター）







日本 LD 学会　自主シンポジウム終了後のふり返りの様子

インクルーシブセミナー

【概要】

インクルーシブセミナー（以下、セミナー）は、2021 年度に「誰でも参加可能な市民向けセミナー」として講義と交流の 2 部構成で企画・開催された実績（実施主体は相模原市発達障害支援センター）をもとに、今年度からは相模女子大学側で企画・運営を行った。2021 年度は新型コロナウィルス感染症の観点から、各回ともオンラインでの開催となったがいずれも約 20 名強の参加者で一定のニーズがあることが確認された。

今年度のセミナーは、中学生以上の知的障害・発達障害のある、あるいは発達特性のある若者（概ね３０代以下）を主なターゲットにして企画した。なぜこの層を主な対象としたかは後述するが、当事者にとって生涯学習の最初の一歩として参加しやすく、継続して参加したくなるような機会となるよう位置づけた。

運営については、事務局（参加申込の受付事務、参加者への連絡等）は「さがまちコンソーシアム」（神奈川相模原市と東京都町田市の大学・ＮＰＯ・企業による地域社会づくり活動）にご協力いただき、実際の運営（事前に事務局との調整、当日の司会進行、会場設営、接客及び会場案内等）は、大学生とコーディネーターとで行った。今年度の運営体制は、以下の通りである。

企画・運営：コーディネーター（武部正明）
事務局　　：さがまちコンソーシアム
当日運営　：相模女子大学人間社会学部人間心理学科　日戸ゼミ所属の学生
　　（山根美月氏他 4 名）
運営協力　：相模女子大学夢をかなえるセンター生涯学習支援課

各セミナーの企画は以下の通りである（表 1）。

表 1　2022 年度のインクルーシブセミナーのスケジュール

	第 1 部のテーマ（講師）
第 1 回（2022 年 10 月 1 日）	「オトナ社会を賢くサバイブ！法律の基礎知識」（シグマ麹町法律事務所・千葉大学法政経学部非常勤講師　弁護士　高倉太郎氏
第 2 回（2022 年 10 月 22 日）	「こころのリフレッシュ☆自分をコントロールする心理学」（相模女子大学人間社会学部　教授　石川勇一氏）
第 3 回（2022 年 12 月 10 日）	「ヒトはなぜ〇〇する？“あたりまえ”を深める哲学入門」（相模女子大学人間社会学部　教授　伊東俊彦氏）

また、好評であった、参加者同士の交流を目的とした「なんでも自慢タイム」を今年度も継続した上で、さらに若者向けに「就労ワンポイント講座」を設け、3 部構成とした（表 2）。

表 2　セミナー各回のスケジュール

各回の構成	内容
オリエンテーション	事前説明
第 1 部（45 分間）	講義（表 1 を参照）
第 2 部（20 分間）	「私の趣味、自慢タイム」
休　憩（5 分間）	
第 3 部（15 分間）	「就労ワンポイント講座」（講師　川口信雄氏）

【実施結果】

各回の参加者数及びアンケート回収率は、表 3 の通りである。

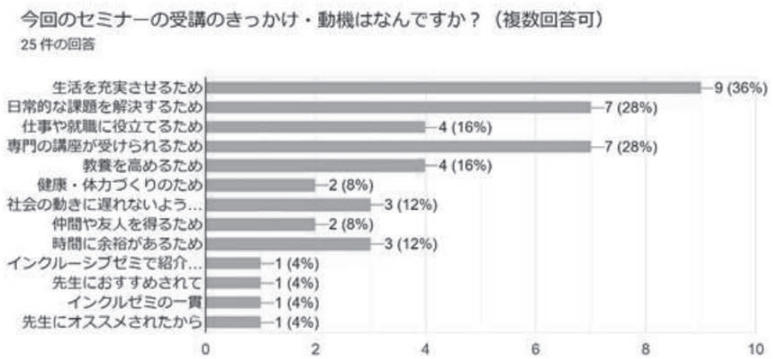
表 3　セミナー各回の参加者数とアンケート回収率

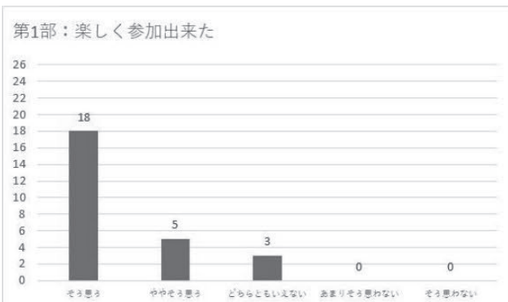
開催日	第 1 回 10 月 1 日（土）	第 2 回 10 月 22 日（土）	第 3 回 12 月 4 日（土）
参加者数	合計 26 名 （内訳） 「女性 18：男性 8」 「中学生 1・高校生 3・ 大学生 5・会社員 5・ アルバイト等 9・ 主婦又は主夫 2・ その他 1」	合計 23 名 （内訳） 「女性 19・男性 3・不明 1」 「中学生 1・高校生1・ 大学生 8・会社員 7・ アルバイト等 4・ 主婦又は主夫 1」 ※不明 1 名	合計 34 名 （内訳） 「女性 20・男性 8・不明 6 」 「大学生 7・会社員 9・ アルバイト等 4・ 主婦又は主夫 4・ 自営自由業 1・その他 3」 ※不明 6 名
アンケート回答数（回答率）	26 名 （100%）	22 名 （96%）	28 名 （82%）

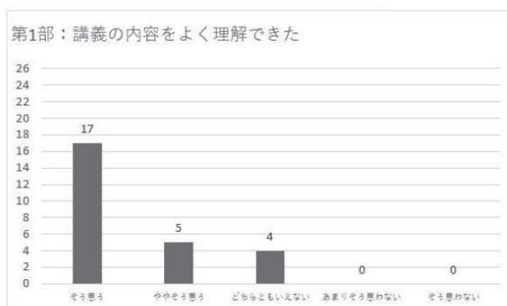
※注 1：参加者の内訳は、アンケート記載を参照したため未提出者は不明扱いとした
※注 2：さがまちコンソーシアムのアンケートとは別のアンケートのため回答率等が異なる
※注 3：運営上の都合により、第 1 回と第 2 回は申込者多数のため抽選外の方がいる

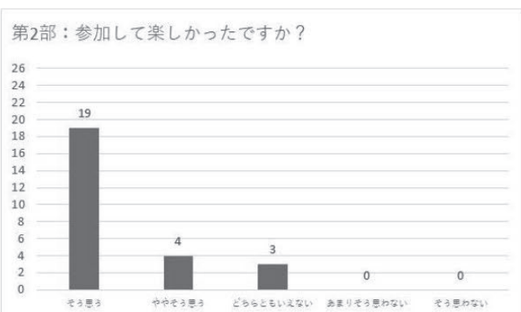
第 1 回から第 3 回のアンケート結果を示す。どの回も第 1 部及び第 2 部は「楽しく参加した」（そう思う・ややそう思う）割合が高かったが、第 2 部で「今後、自分の趣味を発表したい」（発表したい・機会があれば発表したい）とした割合が低かった。第 3 部は運営側から講師に 3 回とも概ね同一の内容での講義を依頼したため、第 3 回でやや満足度が低下した。この 2 点は次年度に改善すべき点と考える。

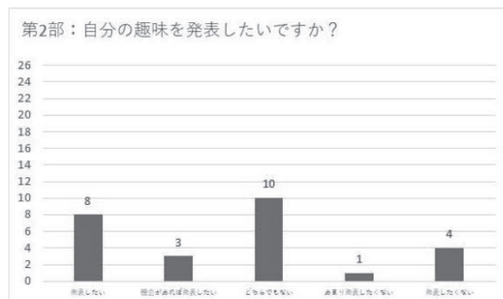
第１回：「オトナ社会を賢くサバイブ！法律の基礎知識」

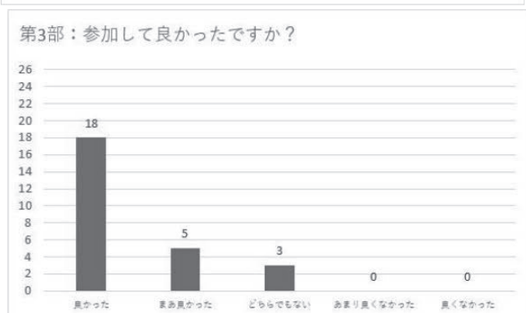


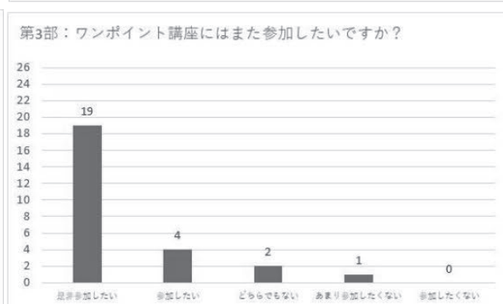




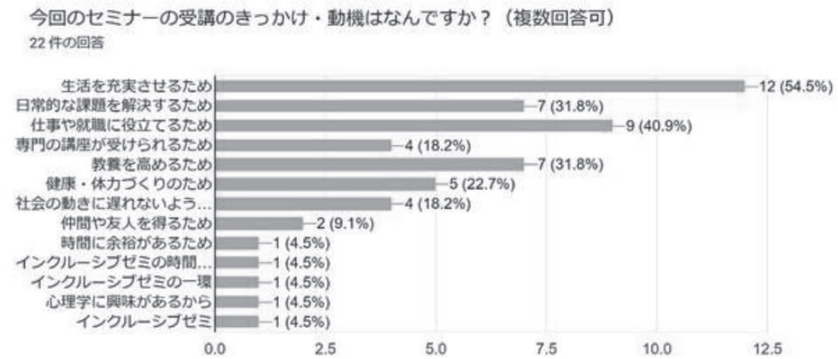


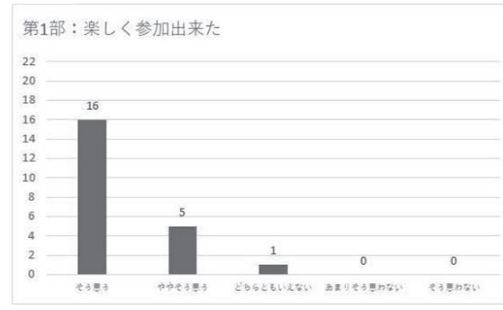


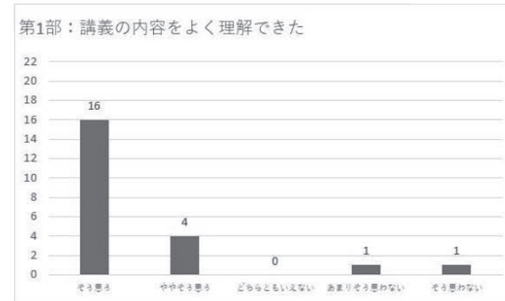


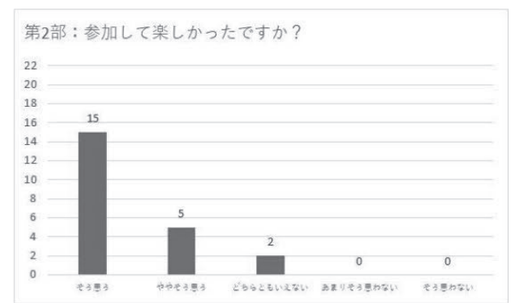


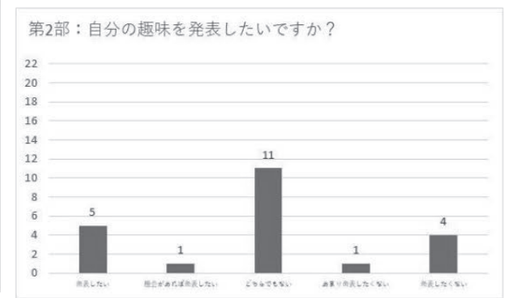
第２回：「こころのリフレッシュ☆自分をコントロールする心理学」

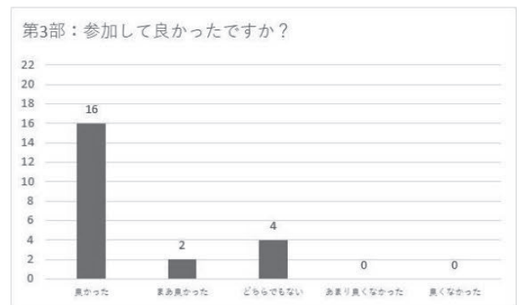


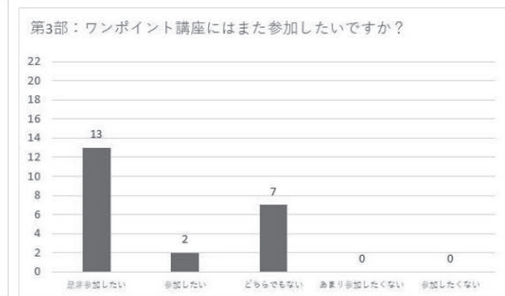




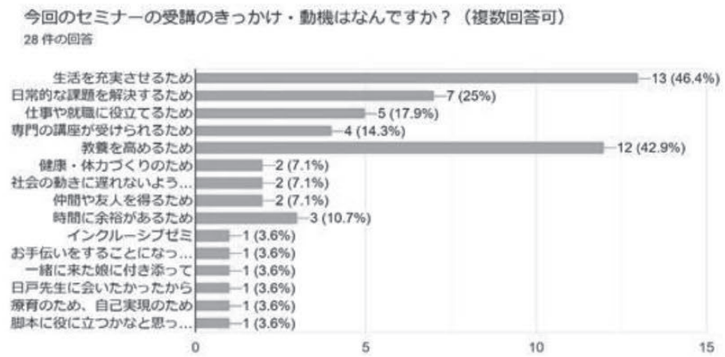


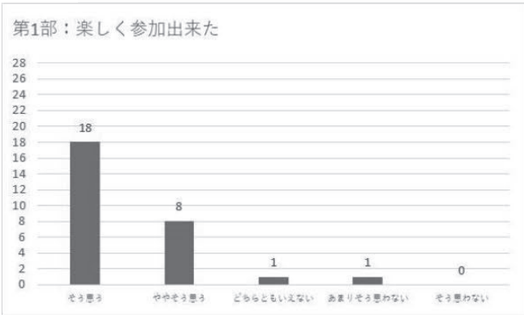


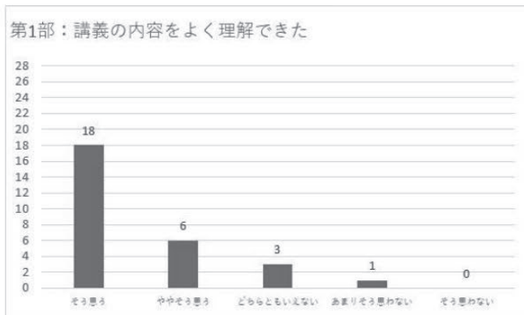


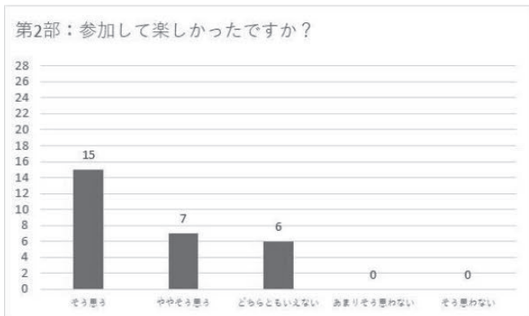


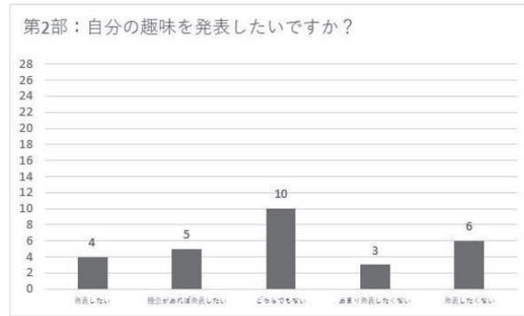
第３回：「ヒトはなぜ〇〇する？“あたりまえ”を深める哲学入門」

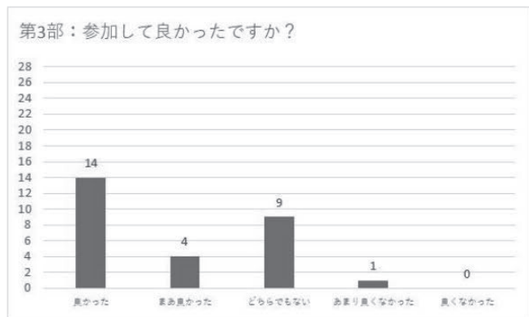


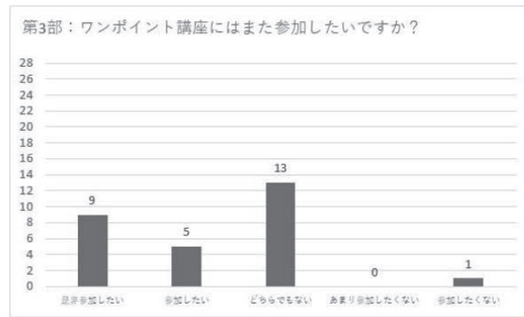












インクルーシブメディア

【概要】

インクルーシブメディア（以下、メディア）は、2021 年度の活動であるインクルーシブリサーチ（以下、リサーチ）から派生した活動である。そのリサーチでは、2021 年度に「障害のある人たちが学びたくなる大学とは何か？」をテーマに当事者と大学生がともに、先駆的な活動をしている団体や大学を視察し、意見交換を行った。その結果として、知的障害・発達障害者の学びたいと思う意欲や高等教育進学への障壁、今後日本の大学に求められること、そして昨年度の相模女子大学での取り組みの一端を動画にまとめ、YouTube で配信するに至った。大学、行政、学生、当事者というメンバー構成での取組みには大きな意義と成果を得たと考えられる。

今年度は、本インクルーシブ生涯学習プログラムを今後、社会実装していくために多くの人たち（学齢期後半から青年期の障害のある方々とその家族、高等学校の先生方、大学関係者、一般の高校生や大学生など）に知ってもらう必要があるが、そのためのコンテンツがない点が課題であった。また、2021 年度の動画は撮影や動画編集を当事者以外の者（大学関係者や編集者）が担当しており、当事者以外の目線でまとめていたという点で、当事者の主張を十分に反映したとは言えなかった。

そこで、2021 年度リサーチに参加していた当事者に声をかけ、2 名（岩本健吾氏と今藤孝拓氏）にメディアチームの一員となってもらうこととした。目的は、インクルーシブセミナーの様子、参加者の感想や意見を中心に取材（インタビュー、撮影）し、動画を作成、最終的には YouTube での配信等の普及啓発のコンテンツにすることである。また、この活動を行うに際し、NHK ディレクター西澤道子氏とカメラマン高岡英幸氏に取材に関する事前の指導（企画と取材・技術指導、倫理面への配慮等）、(株)ビデオ・ペディック 編集マン青木孝文氏に動画編集の技術指導をしていただいた。スケジュールは表 4 の通りである。

なお、メディアでの取材対象をセミナーとした理由は、本インクルーシブ生涯学習プログラムを今後本格的に社会実装する上で、当事者のアクセシビリティや主催する大学や行政側の実践しやすさという点で汎用性が高いからである。

表 4　2022 年度インクルーシブメディア活動スケジュール

【第 1 回】9 月 3 日（土） (相模女子大学 8 号館 834 教室)	事前指導　「企画・取材をしてみよう」 （講師：NHK ディレクター西澤道子氏）
【第 2 回】9 月 24 日（土） (相模女子大学 8 号館 834 教室)	事前指導　「撮影のポイント」 （講師：NHK カメラマン高岡英幸氏）
【第 3 回】10 月 1 日（土） (相模女子大学 7 号館 711 教室)	セミナー会場にて、自分たちで取材・撮影①※講師なし ※別途、この回での初めての「取材」について、第 1 回の講師である西澤氏を交えて、ふり返りも行った
【第 4 回】10 月 22 日（土）	セミナー会場にて、自分たちで取材・撮影②※講師なし

(相模女子大学8号館831教室)	
【第5回】11月5日（土） (相模女子大学8号館834教室)	映像の編集① （講師：(株)ビデオ・ペディック 編集マン青木孝文氏）
【第6回】11月12日(土) (ウィリング横浜会議室)	映像の編集②、取材・撮影の振り返り （講師：(株)ビデオ・ペディック 編集マン青木孝文氏、 NHKカメラマン高岡英幸氏、ディレクター西澤道子氏）
【第7回】12月4日（日） (ウィリング横浜会議室)	映像の編集③ （講師：(株)ビデオ・ペディック 編集マン青木孝文氏）
【第8回】1月7日（土） 【第9回】1月21日（土） (東京都内)	映像構成の再検討、ナレーション考案 （講師：NHKディレクター西澤道子氏、カメラマン高岡英幸氏、 (株)ビデオ・ペディック 編集マン青木孝文氏）
【最終回】2月4日（土）	成果報告会にて制作した動画の公表（相模女子大学）

【事前指導の様子と感想（第1回・第2回)】

第1回と第2回では、外部講師（発達障害や知的障害のある子ども・若者に対する取材及び撮影を多く手掛けてきたNHKディレクター西澤道子氏とカメラマン高岡英幸氏）を招いて、岩本・今藤の両氏が直接指導を受けた。その際、講師と岩本氏・今藤氏の話し合いの結果、インタビュアーが今藤氏、カメラマンが岩本氏として役割を分担することとした。

インタビュー時の対象者への声かけの仕方やタイミング、何を質問するかなどにはじまり、インタビューされる側の心情や心配事などを推測し、何を・どのように配慮すべきかなど座学と実践を交えた指導をただいた。同様に、撮影の指導では具体的な撮影機材の使い方から撮影時のコミュニケーション術まで実践をしながら指導をいただいた。

岩本氏と今藤氏はそれぞれ「インタビューはどんなことを質問すれば良いのかわからなかったが、実際の練習でイメージが持てた」、「撮影の練習をしてみて どの部分を映して良いのか、撮影する適切な場所がわからなかったが、何度も練習したので、最後はだいぶ自信を持つことができた」などの感想を述べた。なお、新型コロナウィルス感染症の影響が生じた回もあったが、講師の方々のご配慮により、ハイフレックス開催により指導を受けることが可能となった。

【取材の様子と感想（第3回・第4回)】

第3回と第4回では、事前指導を経て、実際にセミナー会場にて参加者や講師など取材を行った。セミナー会場には、一般の参加者、インクルーシブゼミから引き続きの参加者（障害のある当事者、大学生）のほかに、前述したとおりセミナーの講師、運営者である大学生と多様な立場の方がおり、取材ではこれらの方々にご協力いただいた。

＜第3回・4回（取材）＞

初めての取材で、緊張しながらの準備

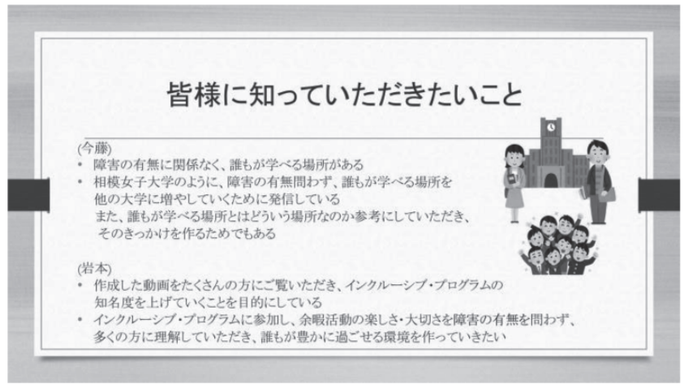
会場でまず運営スタッフの大学生へ取材

取材に少しずつ慣れていく

セミナー講師にも取材

＜メディア活動を通じて、当事者が訴えたいこと＞

メディア活動を通じて、当事者が訴えたいことは、「作成した動画をたくさんの方にご覧いただき、インクルーシブ・プログラムの知名度を上げていくこと」、「相模女子大学のように、障害の有無問わず、誰もが学べる場所を他の大学に増やしていくために発信している」の2点に集約される。以下は、日本LD学会で発表したスライドである。

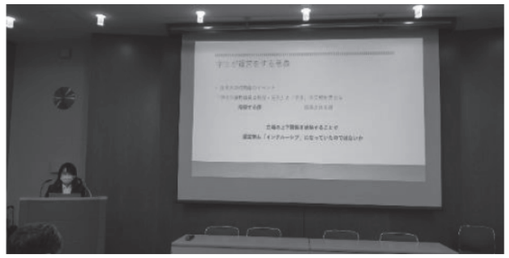


【日本ＬＤ学会第31回大会自主シンポジウムでの発表の様子】

セミナー及びメディアの概要をそれぞれ担当者自身でまとめ、日本LD学会第31回大会の自主シンポジウムで発表を行った。セミナーは山根美月氏、メディアは岩本健吾氏が実践とふり返りで得た知見や実感をもとにして意義や課題を主張した。両名とも初めての学会発表であったが、事前の準備と発表練習を入念に行ったこともあり、堂々としたプレゼンテーションであった。

シンポジウム終了直後のふり返りでは、指定討論者の川口信雄氏と藤野博氏の両名を交

えてコメントをいただいた（本章表紙を参照）。この発表は、本プログラムの意義を主張することはもちろんであるが、自身の取組みをふり返り、言語化し、チームで話し合ってまとめ、プレゼンテーションするという点で、社会人である岩本氏にとっても、社会人になろうとしている山根氏にとっても、貴重な経験となったと考える。



セミナーに関する発表

メディアに関する発表

【インクルーシブセミナー・メディアに関するまとめと今後の課題】

セミナーについては、各回とも中学生から社会人まで参加者がおり、2021 年度に続き一定のニーズがあることが確認された。青年期から成人期にかけて障害者にとって生涯学習の機会を保障する意義を実証する一つのエビデンスと考える。障害者が生涯学習に参加するにはいくつもの障壁があるとされている（津田，2019）。障害特性に理解のある指導者の不在、動機づけが不十分、仲間の不在などが主な障壁とされる。本セミナーではこうした点を少しでも補完するよう努めたが、①その後の継続的な学びの機会の希望者に対してどのような学びの場を提供していくのか、②障害の有無を問わず同世代同士の交流の機会をどう保障するのかといった点が今後の課題である。なお、本セミナーは当日の運営を学生主体で行った点について、「学生が主体的に運営に関与することで、当事者や大学教員とも対等な関係を構築した」と述べている（山根，2022）。単に、大学側が用意したプログラムに当事者や学生が受け身で参加するだけではインクルーシブな環境は構築されないのではないかという指摘は、大学での教育活動においても重要な指摘である。

次にメディアについては、社会実装しやすいセミナーを普及啓発のコンテンツと考え、取材対象とした。活動は、2021 年度のリサーチでの活動の成果を受け、当事者主体でセミナーを取材して、参加者や講師の声をひろい、当事者目線で編集することを最優先した。また、テレビ局や映像制作会社の専門家の方々により、「取材時や編集時の倫理面への配慮も技術の一つであること」を学ぶことができたことで、当事者や運営側の一方向的な思い入れに偏らない普及啓発用の動画にすることができたと考える。今後は、行政と協働してより広く広報活動に活用していく予定である。

近年、知的・発達障害者の支援体制が整い始めているが、特に成人後期を見据えた支援体制は発展途上である。米国 TEACCH プログラムは 1990 年代から「生涯にわたるコミュニティに基盤をおいた援助システム」を掲げ実践している。本事業が行政と連携している意義はまさに地域コミュニティの形成でもあり、より一層の「協働」が必要と考える。

インクルーシブ・リサーチ

狩野晴子（相模女子大学　教員）

令和 3 年度から開始した「インクルーシブ・リサーチ」（以下、リサーチ）のメンバーを中心に、「学校を卒業した後も学びを続ける」をテーマに、発達障害や知的障害の若者、学生を対象としたニーズ調査を行った。得られた知見は事業成果報告会などで発表し、今後の生涯学習プログラムの展開やその他の市民サービスへの反映を図る予定である。また、令和 4 年度は、インクルーシブ教育に関する研修会でリサーチ活動について話す機会があり、これまでの活動の成果を小中学校教員に伝えることが可能となった。

スケジュール

回数	日時	活動	内容
第 1 回	7/9	ミーティング	自己紹介、グループづくり
第 2 回	7/30	ミーティング	目的、テーマの共有、子ども時代の振り返り
第 3 回	8/6	ミーティング	ともに学ぶために、先生方に伝えたいこと
第 4 回	8/23	講演（広報啓発）	小中学校教員研修会にて講演
第 5 回	9/3	ミーティング	研修会の振り返り、卒業後の学びについて
第 6 回	10/15	調査（視察） ミーティング	相模原市社会福祉協議会の視察、市民活動、生涯学習を支える仕組みについて、中間まとめ
第 7 回	11/26	交流会（視察）	知的障害者の本人活動グループへの調査、交流
第 8 回	2/4	成果報告会	活動の報告

スタッフ体制

企画・運営：相模女子大学人間社会学部人間心理学科　准教授　狩野晴子

メンバー：勤労青年 5 名、狩野ゼミ生 8 名（内訳：4 年生 4 名、3 年生 4 名）

※令和 3 年度にリサーチに参加したメンバーに加え、前年度までに上記の生涯学習プログラム（令和 3 年度までのインクルーシブ・ゼミ）を経験し、引き続き大学で活動を共にしたいと願う知的障害や発達障害の若者や学生を対象とした。

協力：相模女子大学人間社会学部人間心理学科　非常勤講師　坂元暁子

プログラムの成果

既存の生涯学習の場に参加するだけでなく当事者が主体となって生涯学習の場を作り出すことできることを知る機会となった。また、ともに学ぶ仲間こそが重要な存在であり、グループの運営方法、メンバー間の関係性についても毎回の活動を通じて考察が深まった。それらの知見を積極的に発信することができており、リサーチの目的であるセルフ・アドボカシーが達成されつつある。以下に第 1 回から第 7 回の活動概要を報告する。

第１回　お互いに知り合おう（ミーティング）　活動概要

開催日　2022 年 7 月 9 日（土）13:00～16:00
会場　　相模女子大学　833 教室
参加者　勤労青年 5 名、学生 8 名（4 年生 4 名、3 年生 4 名）、狩野・坂元
記録者　坂元

【内容】

1．　　13:00～13:30　ウォーミングアップ
　①　はじめのあいさつ（狩野）
　②　インクルージブ・リサーチの説明（狩野）
　　インクルーシブプログラム開発事業とインクルーシブ・リサーチについて説明しました。
　③　同意書の説明と各自署名
　　研究協力についての説明と「協力してもよい」という同意書にサインをしました。

2．　　13:30～14:40　お互いに知り合おう①
　①　自己紹介（各自 5 分）
　　それぞれが準備してきた自己紹介をしました。得意なタイピングやゲームをみせてくれた人もいました。自分が呼ばれたいニックネームもきめました。

＜休憩＞

3．　　15:00～15:20　お互いに知り合おう②
　①小グループに分かれてお互いの理解を深める。
　　３つのグループにわかれ、たくさん質問してお互いの理解をふかめました。

4．　　15:20～15:50　今後の活動についての説明
　①　次回　７月３０日（土）10:00～16:00　同会場
　②　８月２３日　依知中学校での公演　参加：学生５名

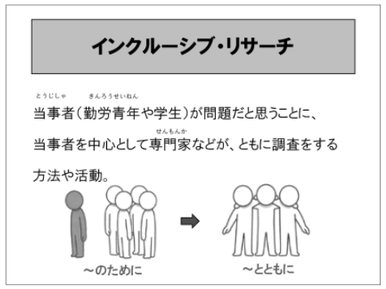
今日中に感想を書いて狩野先生にメールで送ることを確認して終わりました。

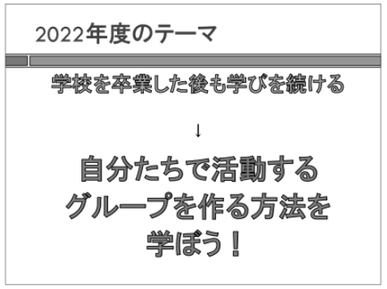
第２回　子ども時代をふりかえろう（ミーティング）　活動概要

開催日：2022 年 7 月 30 日（土）10：00～16：30
会場：相模女子大学　833 教室
出席者：勤労青年 4 名、学生 6 名（4 年生 4 名、3 年生 2 名）、狩野・坂元
記録者：坂元

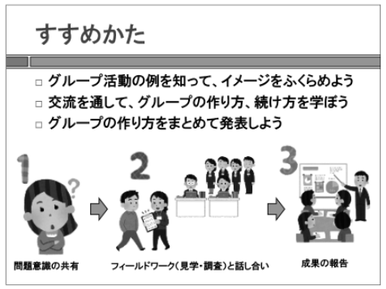
【内容】

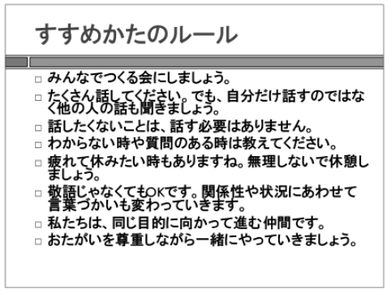
1．10：00～11：00　ウォーミングアップ
　①サイコロトーク
　　一人ずつサイコロを振り、サイコロの目にでた質問にこたえました。
　③　インクルーシブ・リサーチについての説明
　　昨年の報告会資料を見ながらインクルーシブ・リサーチについて説明をききました。(配布資料→)





2．11：00～12：00　依知中学校での講演内容を考えよう
　①8 月 23 日に依知中学校でおこなう講演について小･中学校の先生の研修会で講演を依頼されました。どんな内容にするか考えました。
　《決まったこと》
　・前半は昨年の活動の報告と課題、後半は先生たちに伝えたいこと、になりました。
　・前半（インクルーシブ・リサーチについて）の話をする人の担当を決めました。
　　（1）インクルーシブ・リサーチと知的障害者の大学進学率について（いわにゃん・こんちゃん）
　　（2）インクルーシブ・リサーチの概要（はるぴん）
　　（3）活動の様子（わかなちゃん）
　　（4）活動の成果①（ちはやちゃん）②（はるぽん）
　　（5）課題と 2022 年度の活動について（のえちゃん）





３．13：00～14：00　小・中学校時代を振り返ろう

それぞれが小・中学校時代の写真を見ながらそのころの自分についてみんなに話しました。そして、そのころ障害のある人ない人でともに学ぶ機会があったかどうか、あった人はどんなふうにともに学んだかを思い出しました。

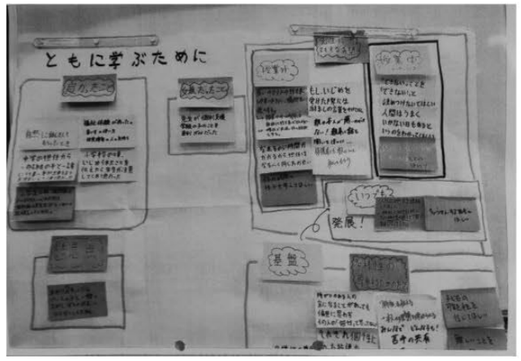
４．14：10～16：45　学校の先生に伝えたいこと

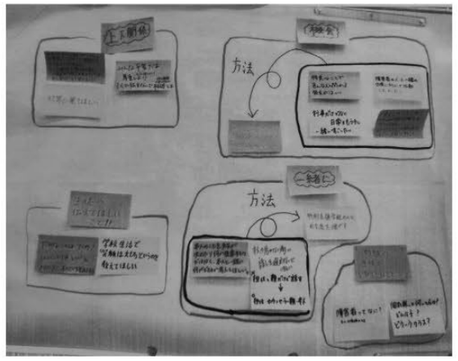
小・中学校時代の思い出から、ともに学ぶために小・中学校の先生にしてもらってよかったこと、よくなかったこと、してほしかったこと、してほしくなかったことについてまとめました。

《進め方》

まず、それぞれがふせんに自分の思いを書いていきました。

それを模造紙に貼り付けました。





みんなで読んで似ているものをグループわけしました。

グループにタイトルをつけました。

５．16：45～17：00　活動のまとめと振り返り

①今日の活動についての感想を一人ひとり話しました。

②　次回の予定は８月６日（土）10：00～16：30　です。

第３回　講演内容を考えよう（ミーティング）　活動概要

開催日：2022 年８月６日（土）10：00―16：00

会場：相模女子大学　833 教室

参加者：勤労青年４名、学生６名（4 年生４名、3 年生２名）、狩野・坂元

記録者：坂元

【内容】

１．10：00―11：00　ウォーミングアップ

２．11：00―12：00　依知中学校での講演内容の打ち合わせをしよう

「ともに学ぶために」の模造紙を見直したり、前回出席した人が感想や気づいたことを話し、前回の内容を振り返ったりしました。前回欠席した人が自分の小・中学校時代の経験やともに学ぶための思いを話しました。

３．13：00―１6：00　リハーサルとインタビューの録画をしよう

①講演の「知的障害者の進学率」のところでつかう劇の録画をしました

・はじめは、いわにゃん（生徒）、こんちゃんとちからくん（先生）、かとちゃん（いわにゃんの友人）で特別支援学校の進路指導の様子だけを録画する予定でした。

・しかし、普通科高校の進路指導の様子もあったほうが違いがわかりやすいのでは？というアイデアから、全員参加で２つの学校の進路指導の様子を演じることになりました。

・急な変更でしたが、台本作りから演技までみんなでがんばりました！

②講演後半「先生方に伝えたいこと～小・中学校時代を振り返って～」の準備をしました

メンバー一人ひとりがインタビューに応えるかたちでおこないます。

- 質問は、「どんな子どもでしたか？」「ともに学んだり、遊ぶ機会はありましたか？」「小・中学校の先生に、何を伝えたいですか？」の３点です。
- はじめに自己紹介をしてから「どんな子どもでしたか？」を話すことにしました。
- 当日欠席予定のかとちゃんは録画をしました。

③全体のリハーサルをおこないました

・前半（Ｉ部）は前回決めた担当の発表者がおこないました。

・とちゅう「障害」と書くか「障がい」と書くかみんなで考えました。

・今回は「障害」とすることにしました。

４．16：00―16：30　活動のまとめと振り返り

①振り返り：みんな「本番でいい発表がしたい！」という意欲が伝わってきました。

④　次回の予定は、８月 23 日（火）13：00―16：30、です。

第４回　厚木市依知南地区小・中学校合同研修会（講演）　活動概要

厚木市依知南地区小・中学校合同研修会での講演
「当事者の声を届けよう～インクルーシブ・リサーチの活動から見えてきたこと～」

日時：2022 年 8 月 23 日（火）　13：00～16：00
場所：厚木市立依知中学校
参加者：勤労青年 3 名、学生 6 名（4 年生 4 名、3 年生 2 名）、狩野・坂元
記録者：坂元

【内容】
◎13 時に小田急線海老名駅に集合し、タクシー2 台にわかれて依知中学校に向かいました。

◎14 時　いよいよスタート！
　はじめに、依知中学校の校長先生からごあいさつがありました。続いて、はるぴんの進行で第 1 部「インクルーシブ・リサーチについて」がはじまりました。パソコンの操作は、ほのちゃんとすずかちゃんが担当しました。

① 「知的障害者」の大学進学率について（担当はいわにゃん・こんちゃんです。）クイズのところでは、zoom で参加の別会場の先生方も手をあげてくれました。
② 「インクルーシブ・リサーチとは」をはるぴんが説明しました。
③ 「昨年度の活動から視察の様子」をわかなちゃんが発表しました。
④ 「活動の成果①だからわたしたちはこんな大学を提案したい」をちはやちゃんが発表しました。「活動の成果②いっしょに活動してよかったこと」をはるぽんが発表しました。
⑤ 「課題と展望」をのえちゃんと、きゅうきょ出席できることになったちからくんがいっしょに発表しました。

・第 1 部につづいて、第 2 部「先生方に伝えたいこと」では、一人ひとり、自己紹介・どんな子どもだったか・ともに学んだり遊ぶ機会があったか・小・中学校の先生に伝えたいこと、を話しました。

・校長先生はじめ、先生方にたくさんほめていただきました。（手前左が校長先生、右が副校長先生）

第５回　自主的な活動について学ぼう（ミーティング）活動概要

日時：2022 年 9 月 3 日　13：00～17：00
場所：相模女子大学　1 号館 3 階 132 教室
出席者：勤労青年 5 名（2 名は途中参加）、学生 4 名（4 年生 3 名、3 年生 1 名）狩野・坂元
記録者：坂元
【内容】
1．ウォーミングアップ
2．依知中学校での講演の報告・振り返り
　講演に参加したメンバーが、「自分たちの経験や思いを伝えることができて良かった」「発表の中でもお互いに支え合えた」「成長を実感できた」と報告をしました。
3．社会人や大学生の自主活動（市民活動）について
　① 身近なグループ活動を調べよう
　　バンド活動、勉強会、サークル活動（ダンス、合唱、数学）などがあり、友人が参加しているという人もいました。
　② 卒業後も活動を続けるには
　　リサーチの活動は 2 月で終了ですが、その後も目的をもって続けられたらいいという意見や、4 年生や就職をして生活が変わるので不安があるという意見が出ました。また、活動するためには連絡手段、会場、活動を広げるための方法などを知る必要があることもわかりました。
4．本人活動について学ぼう
　① 本人活動（セルフ・アドボカシー）とは「自分がこうしたいと思うような生活が送れるよう自分の意見をはっきり言うこと」です。本人活動と本人活動をしている「にじいろでＧｏ！」について、動画を見て事前学習をしました。
　② 動画を見て、「同じ障害なので、これまでの経験などを話したい」「リーダーの奈良崎さんのコミュ力がすごい」「障害とは何かを一人ずつ聞いていて、障害はそれぞれだと思った」「重度の人も大変だけど、軽度だって大変だと知ってほしい」など、感想を話し合いました。
　③ 視察（交流会）で質問したいことを考えました。質問したいことは、「どうやってメンバーと支援者を集めたのか」「参加したきっかけは何か？」「なぜ参加しようと思ったのか」「本人は支援者のことをどう考えているか？」「支援者は本人との関係をどう考えているか」「活動で大事にしていることは何か」「活動を続けていて良かったことは何か」などです。
5．振り返りと次回について
　次回は 10 月 15 日（土）13:00～16:30、　にじいろで Go！との交流会の予定です。
　⇒交流会は 11 月に延期になりました。

第６回　自主的な活動を支える仕組みを学ぼう（視察）活動概要

日時：2022 年 10 月 15 日　10：00～15：30
場所：（午前）南区保健福祉センター　ボランティア活動室
　　（午後）相模女子大学　マーガレット本館　2123 教室
出席者：勤労青年５名、学生８名（4 年生４名、3 年生４名）、相模原市発達障害支援センター3 名、狩野
記録者：狩野

【内容】

1. 自主的な活動を支える仕組みを学ぼう

① 「活動をはじめたいあなたへ」
相模原市社会福祉協議会の三枝真澄さんから、地域での活動の始め方、どんな支援をうけられるのか説明をしてもらいました。活動をする時に大切なことは、「目的を共有すること」「継続させるための手段を考えること」「担い手と参加者の分け隔てなくすこと」「打ち合わせや振り返りの時間をもつこと」「地域の人から応援してもらう存在になること」。そして「楽しんで活動すること」が何よりも大切だそうです。

② 南区地域福祉交流ラウンジの見学
登録した団体は無料で利用できるスペースを見学しました。相模大野駅のすぐ近くで便利な場所でした。

2. これまでの活動をふりかえろう。（中間まとめ）
つぎの３つの点についてグループに分かれて話し合い、発表し合いました。

① 活動の中で印象に残っていることとその理由
「アットホームな雰囲気」「明るく気さくに迎え入れてくれた」と言った意見が新メンバーから出された一方、従来のメンバーからも「子ども時代の振り返りを通して新たな面を発見した」と言った意見がありました。また、活動について外部に発信できたという意味で依知中学校での講演が印象に残っている人も多かったです。

② 活動を通して学んだこと
一つ目は「グループ活動の進め方」について、グループワークの進め方、コミュニケーションの取り方、話しやすい雰囲気の重要性、相談先としての社協の存在などを学びました。二つ目は「インクルーシブな活動について」で、誰とでも関わることの大切さ、リサーチ活動にニーズがあり外部へ発信する必要性を学びました。

③ 一緒に活動して感じたこと、得たこと
人数が増えたことでグループ運営の難しさを感じることが多くありましたが、新しい意見や視野の広がりなど良い変化もあったこと、その中で「受容すること」「一人ひとりを尊重すること」「積極的に行動すること」が大切だと感じたそうです。

3. 活動の振り返りと次回について　　次回 11 月 26 日（土）13:00~16:30　交流会

第７回　本人活動グループ交流会（視察）活動概要

日時：2022 年 11 月 26 日（土）　13：00～16：00
場所：藤沢市役所　本庁舎５階　市民利用会議室
出席者：勤労青年４名（1 名は途中参加）、学生６名（4 年生２名、3 年生４名）狩野・坂元
記録：坂元

【内容】

1. あいさつ、ルール説明
にじいろで Go！の奈良崎さんの司会進行で始まりました。くじを引いて赤・希・緑の３つのグループに分かれて座りました。

2. 自己紹介
一人ずつ自己紹介をしました。内容は名前、どこ（どこの会）から来たのか、趣味・特技、自分の障害のこと（自分の苦手なことでもかまいません）です。緑グループの時は、グループリーダーになったかとちゃんが司会をしました。

3. 本人の会の紹介
「横須賀トゥモローかえる会」、「茅ケ崎本人の会　サザン Sea」、「藤沢ブルースカイ」、「本人会サンフラワー横浜」、「相模女子大学インクルーシブ・リサーチ」、「にじいろで Go！」の６つの会が、紹介をしました。
　インクルーシブ・リサーチは、かつこちゃん、かとちゃん、ちからくん、IWA ニャンが紹介してくれました。

4. サイコロトーク
時間がないので、代表者だけになりましたが、相模女子大チームからは、わかなちゃん、ポンズ、かつこちゃん、まっきーがサイコロトークに挑戦しました。

5. 神奈川県からのお知らせ
県の職員から「神奈川県当事者目線の障害福祉推進条例～ともに生きる社会を目指して～」の紹介がありました。お願いすると３月までは県の職員が出前説明会を開いてくれるそうです。

6. 感想、まとめ
おかしとジュースをお土産にいただいて解散になりました。

7. ふりかえり
メンバー全員で振り返りをする時間がとれないので、それぞれメールに書いておくってもらうことになりました。

インクルーシブ・リサーチ活動の意義と今後の課題

相模女子大学人間社会学部人間心理学科　狩野晴子

ここでは、LD 学会において発表した内容をもとにインクルーシブ・リサーチの今年度の活動の成果とその意義、今後の課題について報告したい。

予定している活動の 8 割を終えた現時点で、活動の成果として以下の 3 点が現れ始めている。1 点目は、当事者グループを運営するための重要な要素が明らかになり、それらがノウハウとして蓄積されてきたことである。リサーチのメンバーである今藤孝拓氏の言葉で表すならば、それは「フラットな関係を築くこと」であり、そのためには①親しみを込めてニックネームで呼び合う、②友達口調で話す、③活動以外の場での交流、の 3 点を心掛けたという。それにより、困ったり悩んだりした時に相談しやすい雰囲気になり、活動でも積極的に発言できるようになったという。これは、プログラム開発にあたり、我々はプログラムの内容に焦点を当てがちだが、当事者にとっては内容以前に誰とどのように取り組むかということも非常に大切な要素であることを示す重要な指摘である。2 点目は、活動が 2 年目に入りメンバー個人の成長とともにグループとしても成熟度が増している点である。例えば、1 年目は特に話題になることもなかった障害の「害」の字をどのように表記するのか、グループとしてどう考えるのか、といった議論が可能になったり、交流が深まるにつれてメンバーが相互にどのように向かい合うのかを真剣に考えるようになるなど、進化と深化が見られるようになった。これらは、「ともに生きる」という言葉の裏にあるきれいごとでは済まない面倒くささに直面しつつも、それを投げ出さずにともに生きることを支える力になるのではないだろうか。そして 3 点目は、当事者が参加し主体的に活動する意義を明らかにしたことである。当事者主体の原則は障害者福祉の領域では今や無視できないものになっているが、教育現場においては、これまであまり取り組まれていなかったように思う。教員研究会で講演をした際に、当事者の声を聴いた教員たちが「初めてインクルーシブとは何かがわかった」と漏らした声が忘れられない。その言葉から教育現場に当事者の声を届ける必要性があること、インクルーシブ教育を進める上で、当事者が参加し主体的に発言する重要性とその意義を改めて確認する事ができた。また、講演を終えたメンバーたちの姿からは、達成感と自信が満ち溢れており、彼らのエンパワメントという意味でも主張を伝える場が重要であることを痛感した。

今後の課題は「参加メンバーの負担感の解消」と「発信する場の確保」である。特に前者について学生メンバーの下斗米若菜氏の指摘によれば、参加すればするほどリサーチというグループへの所属意識は高まるが、その分負担も大きくなり、負担感から活動の継続が困難になるメンバーもいたという。事業として実施する際は、目標を設定し成果を出すことが当然のこととして求められるが、それが活動の継続を困難にしていることもまた事実である。しかし、リサーチは活動を継続すること自体が成果という側面がある。活動が継続できるよう評価の方法についても考え直す時期が来ているのではないだろうか。

令和４年度インクルーシブ・プログラム開発事業　連携協議会

令和 4 年度「学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業」において、実践的な研究・開発を実現することを目的に連携協議会を設置。地域の生涯学習、教育、スポーツ、福祉、労働等の関係機関並びに障害者の地域生活等に関する知見を有する特別支援学校及び障害者福祉機関と連携を図り、効果的な生涯学習プログラムの研究・開発等について協議した内容を報告する。

委員

氏名	所属等
川口　信雄（会長）	（株）はまリハ　顧問
藤野　博	東京学芸大学大学院教育学研究科　教授
武部　正明	山梨英和大学人間文化学部人間文化学科　准教授
見目　茂則	神奈川県立相模原養護学校　校長
波呂　房江	神奈川県立橋本高等学校　副校長
田中　麻夕子	神奈川県立上鶴間高等学校　インクルーシブ教育進路担当教諭
長沢　伸孝	社会福祉法人相模原市社会福祉事業団　地域支援課長
西村　三郎	社会福祉法人風の谷やまびこ工房　管理者
岩本　健吾	インクルーシブ・プログラム開発参加協力者代表
今藤　孝拓	インクルーシブ・プログラム開発参加協力者代表
下斗米　若菜	インクルーシブ・プログラム開発参加協力者代表（相模女子大学　学生）
奥村　裕司	相模女子大学副学長
本橋　明彦	学校法人相模女子大学　総務担当理事（事務局長）
松本　隆人	相模原市教育委員会教育局生涯学習部　生涯学習課　課長
宮原　幸雄	相模原市教育委員会教育局学校教育部教育センター　所長
加藤　政義	相模原市教育委員会教育局学校教育部　青少年相談センター　所長
白井　由美	相模原市市民局スポーツ推進課　課長
小林　誠	相模原市健康福祉局地域包括ケア推進部　高齢・障害者福祉課　課長

事務局構成員

氏名	所属等
日戸　由刈	相模女子大学人間社会学部人間心理学科　教授
狩野　晴子	相模女子大学人間社会学部人間心理学科　准教授
齋藤　淳志	相模女子大学　大学事務部長
有田　雅一	相模女子大学　夢をかなえるセンター部長

天野　徹	相模原市立療育センター陽光園　所長
井上　敏治	相模原市発達障害支援センター　所長
村上　理	相模原市発達障害支援センター　主任
仁井田　正樹	相模原市発達障害支援センター　主任
後藤　成海	相模原市発達障害支援センター　主事
曽根田　杏奈	相模原市発達障害支援センター　主事

第１回　会議録

会議名		令和４年度　インクルーシブ・プログラム開発事業　第１回連携協議会
開催日時		令和４年７月２３日（土）　１８時００分～２０時００分
開催場所		相模女子大学　会議室１ ※一部オンライン（ＺＯＯＭ　Ｍｅｅｔｉｎｇｓ）併用
出席者	委　員	１５名：川口信雄氏、藤野博氏、武部正明氏、見目茂則氏、波呂房江氏、田中麻夕子氏、長沢伸孝氏、西村三郎氏、岩本健吾氏、今藤孝拓氏、下斗米若菜氏、奥村裕司氏、本橋明彦氏、宮原幸雄氏、白井由美氏（欠席名：松本隆人氏、加藤政義氏、小林誠氏）
	事務局	９名：日戸由刈、狩野晴子、齋藤淳志、有田雅一、天野徹、井上敏治、村上理、仁井田正樹、曽根田杏奈
議題等		１　あいさつ ２　令和４年度　連携協議会について ３　議題 （１）　学校卒業後における障害者の学びの支援に関する状況と相模原市の取組みについて ア　事業概要について イ　令和３年度の連携協議会及び令和４年度の連携協議会の目的について （２）　令和３年度のインクルーシブ・プログラム開発研究事業の実施報告について （３）令和４年度のインクルーシブ・プログラム開発研究事業について ４　その他

議　事　の　要　旨

１　あいさつ
相模原市療育センター陽光園所長　天野徹氏、相模女子大学副学長　奥村裕司氏からの挨拶の後、各委員より自己紹介を行った。

２　令和４年度　連携協議会について
本協議会会長選出について協議がなされ、互選により川口信雄氏が会長に推薦され、承認された。

３　議題
（１）　学校卒業後における障害者の学びの支援に関する状況と相模原市の取組みについて
ア　事業概要について
事務局より資料に基づき説明。
イ　令和３年度の連携協議会及び令和４年度の連携協議会の目的について
事務局より資料に基づき説明がなされた。日戸氏より、令和４年度の本協議会は、当事者の方が正式な委員になったことが令和３年度との大きな違いである旨を説明。

（２）令和３年度のインクルーシブ・プログラム開発研究事業の実施報告について
事務局　相模女子大学より資料に基づき説明がなされた。あわせて、岩本委員、今藤委員、下斗米委員よりインクルーシブ・プログラム開発参加協力者として報告。

【報告内容】
今藤委員：社会人４年目になるが、年数が経つにつれて業務の責任感が増えていくため、後輩に指導することやミスをした時の責任の重さで精神的に辛くなった時もあった。しかし、第３の居場所であるインクルーシブ・プログラム活動を通して、仕事で辛い時があっても様々な場所で活動し充実した日々を送ることができているため、とても良いと思っている。

下斗米委員：インクルーシブ・プログラムに参加してよかったことは、小学校、中学校、高校と（当事者と）関わる機会があまりなく、あったとしても支援をされている現場を見るという機会が多かったため、共に同じ立場で考えるきっかけになったことである。

岩本委員：社会人１年目は会社と家の往復が当たり前で、学生時代より友達と共に過ごす時間は減ると思っていたが、４年目になりインクルーシブ・プログラムに参加して第３の居場所を見つけることができた。プログラムに参加して自分の中で変わったと思うところはこれまでは自分中心に動くことが大半で、人の気持ちを考える余裕さえなかった。しかし、学生と関わることにより相手への思いやりを学ぶことができた。会社での面談や上司との話し合いも以前よりスムーズになり、私にとっての財産になった。

（３）令和４年度のインクルーシブ・プログラム開発研究事業について
事務局　相模女子大学及び武部委員より、資料に基づき説明。

【意見交換】
見目委員：インクルーシブ・メディアは可能性があると思って話を聞いていた。今は小さい集まりの中でやっているが、最終的にＹｏｕＴｕｂｅ等で発信できることは、世界的に「いいな」という取り組みになる。誰でも、いつでも、どこでも、本当の意味での「みんなで一緒にやりましょう」という活動に繋がっていくという非常に大きな可能性がある。

川口会長：インクルーシブ・メディアでは「将来学びたい場所で学べる」ということを、当事者がＹｏｕＴｕｂｅで語る宣伝動画を自分たちで作ることができる。そのためには、自己理解や受け取る方を想像することが必要になる。インクルーシブ校等、神奈川県には多様な選択肢があるが、今回の取り組みは具体的なモデルを示し、後期中等教育が終わった後の充実に大きな一石になるのではないかと思っている。

４　その他
事務局より、今後のスケジュールについて説明がなされ、第２回連携協議会（令和４年１２月３日）、第３回連携協議会（令和５年２月４日）の日程について確認された。

以　上

第２回　会議録

会議名		令和４年度　インクルーシブ・プログラム開発事業　第２回連携協議会
開催日時		令和４年１２月３日（土）　１４時００分～１６時００分
開催場所		相模女子大学　会議室１
出席者	委　員	１４名：川口信雄氏、藤野博氏、見目茂則氏、波呂房江氏、長沢伸孝氏、西村三郎氏、岩本健吾氏、今藤孝拓氏、下斗米若菜氏、奥村裕司氏、本橋明彦氏、松本隆人氏、宮原幸雄氏、加藤政義氏（欠席名：武部正明氏、田中麻夕子氏、白井由美氏、小林誠氏）
	事務局	８名：日戸由刈、狩野晴子、齋藤淳志、有田雅一、天野徹、井上敏治、後藤成海、曽根田杏奈
議題等		1　あいさつ 2　インクルーシブ・プログラム開発事業連携協議会設置要綱について 3　議題 （1）インクルーシブ・プログラム開発事業の実施状況について ア　インクルーシブ生涯学習プログラムの報告 イ　エンパワメント・プログラムの報告 （2）インクルーシブ・プログラムに関する啓発、調査の実施状況について ア　広報・啓発活動の報告 イ　市民意識調査の報告 4　その他

議　事　の　要　旨

1　あいさつ
相模原市療育センター陽光園所長　天野徹氏､相模女子大学副学長　奥村裕司氏からの挨拶。

2　インクルーシブ・プログラム開発事業連携協議会設置要綱について
事務局　発達障害支援センターより資料に基づき説明。

3　議題
（1）インクルーシブ・プログラム開発事業の実施状況について
ア　インクルーシブ生涯学習プログラムの報告
事務局　日戸氏より資料に基づきインクルーシブ生涯学習プログラムの報告がなされた。
イ　エンパワメント・プログラムの報告
欠席の武部委員より事前に作成された動画によりメンター・メディア活動の報告がなされた。また、事務局　狩野氏よりインクルーシブ・リサーチの報告を行った。

【意見交換】
波呂委員：自分の学校の生徒が第１回オープンセミナーに２名、第２回に１名参加した。周知は保護者会で実施し、保護者も関心を示していた。高校生ではあるが、今後の学びに対するモチベーションが上がったと感じている。

事務局　日戸氏： 2019 年度のセミナーは大学主催の「さがみアカデミー」としての企画であり、発達障害や知的障害の青年や中学生が受講して満足できるような内容構成にすることができた。しかし、2020 年度からは発達障害支援センター（市）が主体となって「さがまちコンソーシアム」として企画を行うようになり、高齢者を含む多様な市民の方たちが参加されるようになったため、発達障害や知的障害の当事者に対してセミナーの時間内に交流の時間を確保する体制が難しくなった。今後は、市は引き続き「さがまちコンソーシアム」において関連する学校の先生や保護者などを含めた市民のための啓発目的のセミナーを企画し、大学は、当事者や若者が参加し相互交流を通じて満足感を得るためのセミナーを「さがまちカレッジ」として企画する、という役割分担で進めたい。

藤野委員：障害のある方が参加できていることだけでも感銘を受けるが、更に自分の言葉で表現できているところがとても素晴らしいと感じた。これこそが、インクルーシブ・プログラムの成果であると改めて感じる。市や関係する先生方や関係団体との連携によって展開されている素晴らしい実践であると思っているが、将来、このプログラムが各地域でどのように展開されていくのか、他の地域でも取り組める要素を落とし込んでいくと更に素晴らしいものになると考える。

（2）インクルーシブ・プログラムに関する啓発、調査の実施状況について
ア　広報・啓発活動の報告
事務局　発達障害支援センターより報告。
イ　市民意識調査の報告
事務局　発達障害支援センターより資料に基づき報告。
その他、今年度の事業費について報告。

【意見交換】
藤野委員：本事業の重要なポイントは相模原市という行政が関与しているところである。このように社会実装されている地域は他にはなく本事業の特色であると考えている。ぜひ今後も開発事業が終了しても、しっかり地域に根付くための持続可能なシステムを構築してほしい。

川口会長：本日、事務局の日戸さんから「当事者と若者のためのセミナー」を大学で、「学校関係者や保護者向けの啓発目的のセミナー」は市で、と役割分担をすることが提案された。これは会長としても、来年度に向けてぜひやってほしい。これまで、セミナーやリサーチ、メディア等思いついたことを色々と取り組んできた。これから、この取組みがどこでもできるというパッケージの構築に取り組んでいかないといけないと感じている。本事業は、公民館等ではなく、大学という場を活用した発達障害や知的障害の青年たちに対する生涯学習をどうするかという視点で取り組んできたため、この点はぶれずに進めてほしい。障害のある若者が学べる機会が拡大されていくことを期待している。

4　その他
事務局より今後のスケジュールとして、第３回連携協議会を令和５年２月４日（土）の成果報告会の後に相模女子大学において開催を予定していることをお知らせして終了した。

以　上

2022 年度インクルーシブ・プログラム開発事業総括

「共に学ぶことで共に変わった」

連携協議会会長　川口信雄

筆者には若葉台特別支援学校の進路専任として就労先の開拓やマッチング、定着支援にあたった経験がある。その中で気付いたことは働き続けるためには働くための力「ハードスキル」だけでなく、相談力や余暇などの「ライフスキル」が必要だということである。そこで、ライフスキル養成を教育課程に強く反映させた。しかし、卒業生の支援を続けていく中で、その限界も見えてきた。急速に変化する現代社会において彼らは言葉にし難い困りごとや不安を抱えるようになってきており、高等部で学んだことだけでは乗り越えられない。問題に直面しても心折れることなく豊かな人生を送るためには、社会人になっても「学び続ける」ことが必要だと実感させられている。また、彼らから「進学という選択肢も欲しかった」「もう少し学びたかった」「大学ってどんなところなのかな」などの声も聞こえてくる。就労して最初はよかったのだが、しばらくすると自宅と職場の往復が生活の中心になり、マンネリに陥る卒業生も少なくない。

わが国の特別支援学校卒業生の大学等への進学率はわずか 0.5%と極端に少なく、就職か福祉かの二択を迫られている。大学には知的障害や発達障害の若者が学ぶ場はほとんど用意されていないのだ。一方、欧米や韓国の大学では知的障害者があっても本人の意志を認め、一人の大学生として受け入れているケースが数多く報告されている。その背景には 2006 年に採択された国連障害者権利条約の存在がある。同条約、第 24 条、第 5 項には「締結国は、障害者が差別なしに、かつ、他の者との平等を基礎として、一般的な高等教育、職業訓練、成人教育及び生涯学習を享受することができる」とある。2014 年に日本も同条約を批准した。（長谷川正人,2020）

海外の大学事情などを知るにつれ、「当事者がキャンパスで大学生と共に学ぶ機会を創りたい」「卒業生にもキャンパスライフを経験させたい！」という思いが徐々に募ってきた。そのような折に、相模女子大学に日戸由刈教授が赴任され、2018 年 5 月 31 日にこのプロジェクトが始動した。最初の会議の主な出席者は日戸由刈、森平直子、トートガーボル、本橋明彦、有田雅一、長谷川正人、筆者である。翌 2019 年 5 月 24 日に第 1 回インクルーシブ・ゼミがスタートした。現在は「夢をかなえるセンター（生涯学修支援課）」の所管となり、大学側の全面的な理解と支援を受けている。

特別支援学校卒業生の進路としては、ゆたかカレッジ（福祉型カレッジ）や特別支援学校の福祉型専攻科などもある。これらは青年期の学びやモラトリアムの場としては貴重で

価値ある実践といえる。しかし、いずれも当事者同士の学びの場であり、大学キャンパスでの同年代の大学生との学びは多くない。

相模女子大学におけるインクルーシブ・プログラムはキャンパスを舞台に継続的に実施されているだけでなく、当事者と大学生の間にフラットな関係性をつくる仕掛けがある。その一つは当事者全員が勤労青年であることが関係している。彼らが実社会で悩んだり困ったりしたことやそれをどう乗り越えたかなどの経験談はこれから社会に出ようとする大学生にとって貴重な情報に満ちている。彼らは大学生にとって、ある意味憧れの存在でもあった。

プログラムの進行と共に、大学生は自己開示し、生きづらさや悩みを相談することなどを通して自己理解や障害理解が深まった。一方の勤労青年は同年代の大学生と学ぶことで肯定的な自己概念が育まれ、毎日の生活にメリハリと潤いが生まれた。まさに「共に学ぶことで共に変わる学び」といえよう。共生社会の実現には、同世代の当事者と大学生が同じキャンパスで共に学ぶことを通して相互理解を深めていくことが求められていると考える。

ともするとインクルーシブ教育には「当事者が大学での学びでこれだけ成長できました！」のように、障害者の権利擁護の文脈が強く出がちではないだろうか。その視点ももちろん大切であるが、インクーシブ教育は大学生にとっても大きなプラスになることを声を大にして言いたい。

相模女子大学を舞台にしたインクルーシブ・プログラムはチャレンジの連続である。この 4 年間、私たちは「インクルーシブ・ゼミ」「出前講座」「セミナー」「リサーチ」「メディア」と良さそうだと思ったことに積極的に取り組んでいったが、それが決して万能なプログラムとは考えていない。全国各地の大学でその大学にあったインクルーシブ・プログラムが展開され、「もっと学びたい」「キャンパスライフを楽しみたい」という若者に学びの場が広がっていくことを期待している。

出発点としては「生涯学習事業」の一環として取り組むのが現実的と考える。また、障害者支援や就労支援のノウハウを持つ福祉事業者と大学が連携するのもよいだろう。将来的には知的障害者にも対応した課程をもつ学部設置などの大きな制度改革につながっていくことも期待したい。

文献：長谷川正人（2020）「知的障害者の高等教育保障への展望」クリエイツかもがわ
川口信雄（2021）「特別支援教育研究 2021 年 9 月号」東洋館出版

2022 年 9 月吉日

報道機関　各位

相模女子大学は相模原市と協働し 9 月より「インクルーシブ生涯学習プログラム」を開講します

相模女子大学（神奈川県相模原市南区、学長・田畑雅英）は、令和 3 年度より、相模原市からの委託を受けて、発達障害や知的障害（以下、発達障害）の若者を対象にインクルーシブな生涯学習および学生や市民との交流のためのプログラム開発（インクルーシブ・プログラム開発事業）を、相模原市発達障害支援センターと協働で行っています。

今年度は、前年度の実績を踏まえ、1)他大学でも汎用可能な「インクルーシブ生涯学習プログラム」のモデル開発、および 2)プログラム運営に当事者の参加を図り、市内の発達障害の高校生や若者に向けてプログラムの魅力を発信する技術や、活動を通じて参加者をサポートする心がまえを身につける「エンパワメント・プログラム」の実践、という 2 本柱で開発を進めています（図）。

このうちインクルーシブ生涯学習プログラムは、9 月 24 日の「入講式」を第 1 回として秋学期の土曜日に全 8 回を計画しています。基盤は、前年度までインクルーシブ・ゼミと称して開発してきた、発達障害の若者 4～5 名と相模女子大学の学生 4～5 名の固定メンバーによる「クローズドな講座」（通称、ゼミ）です。ゼミでは毎年、新規参加者を募り、パーソナルポートフォリオづくりや「私のトリセツ相談会」など構造化された活動を通じた若者・学生の双方に自己理解の深化と相談の成功体験をねらいとしており、将来エンパワメント・プログラムの担い手となることへの心がまえや動機も育てていきます。

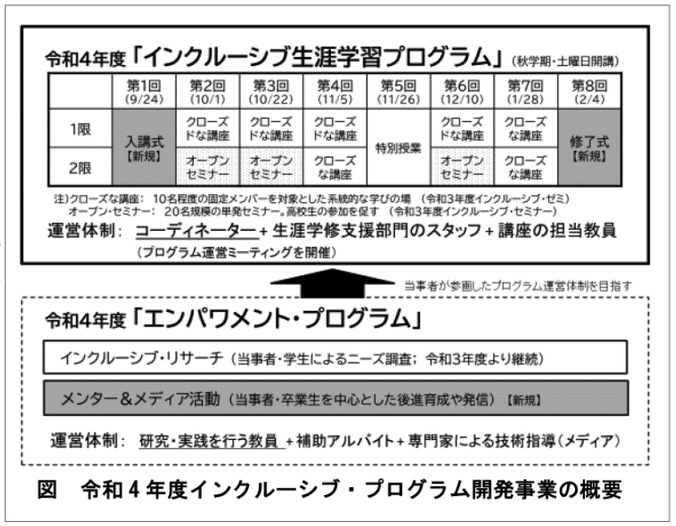


図　令和 4 年度インクルーシブ・プログラム開発事業の概要

また、生涯学習プログラムには、多様な市民が参画できる「オープンなセミナー」（以下、セミナー）が 3 回組み込まれています（表）。セミナーの時間帯は中学生以上なら誰でも参加が可能であり、発達障害の高校生をターゲットに積極的な参加を呼びかけています。ゼミの固定メンバーもセミナーに参加し、講義を聴講し、一般の若者・市民との交流機会を持ちます。それだけでなく、ピアサポーターとして外部から参加する発達障害の後進と関わり、来年度のゼミへの参加を呼びかけるなど、当事者同士による循環モデルの構築にも一役買っています。

エンパワメント・プログラムは、生涯学習プログラムの下支えを担います。活動のひとつとして、前年度までにゼミに参加した発達障害の若者と学生が中心となってインクルーシブ・リサーチを行っています。インクルーシブ・リサーチでは自身の関心を探求するための調査方法や社会への発信の方法を学ぶことでセルフ・アドボカシー（自分の権利を守るために発言すること）が可能になることをねらいとしています。昨年度は「知的障害や発達障害の若者が大学に求めるニーズとは」というテーマで神戸大学の KUPI など先進的な実践の視察を行い、成果報告会で発表しました。今年度は、そこで共有した問題意識を地域の教員向け研修会などで発信しつつ、「学校を卒業した後も学び続けるためには」というテーマを模索する目的で、当事者組織や市民活動・生涯学習支援の視察を予定しています。また、新たな試みとして、生涯学習プログラムの魅力を発信するために、プロの指導のもと、若者自ら取材や撮影、編集を行い、動画をつくって発信していくメディア活動を行う予定です。

本プログラムの成果は 2022 年 10 月の日本 LD 学会（於：京都）の自主シンポジウム、および 2023 年 2 月 4 日開催予定の報告会にて発表します。発達障害の若者も発表者の一員として登壇する予定となっています。

■オープンセミナー（さがまちカレッジ）

開講日時		各回の内容・サブタイトル	担当講師	会場・教室
1	10/1（土）11:00～12:30	**オトナ社会を賢くサバイブ！法律の基礎知識** 法律は、安心・安全な暮らしを守るための“必須アイテム”。これから成人するキミにも、すでに成人したアナタにもきっと役立つ、賢く生きる術（すべ）を身につけよう！	高倉　太郎 （シグマ麹町法律事務所 弁護士・千葉大学法学部 非常勤講師）	相模女子大学 7 号館 1 階 711 教室
2	10/22（土）11:00～12:30	**こころのリフレッシュ☆ 自分をコントロールする心理学** どうしてこころは、ドキドキ・モヤモヤ・イライラするの？ 感情がわきあがる仕組みや自分をコントロールする方法を学び、こころをリフレッシュするヒントを見つけよう！	石川　勇一 （相模女子大学 人間社会学部　教授）	相模女子大学 8 号館 3 階 831 教室
3	12/10（土）11:00～12:30	**ヒトはなぜ、〇〇する？ “あたりまえ”を深める哲学入門** 私たちが“あたりまえ”と思っていること…でも、それって本当？アート（芸術活動）を例に、日常のあたりまえを“あえて”“深く”追求しよう！ 考えるって人生を豊かにする…そんな体験をご一緒に☆	伊東　俊彦 （相模女子大学 人間社会学部　教授）	相模女子大学 7 号館 1 階 711 教室

＊オープンセミナー（さがまちカレッジ）は、以下のアドレスからお申込みください。
https://www.sagamachi.jp/manabi/consuniv/course.html

【本件に関する取材依頼・お問い合わせ先】夢をかなえるセンター　生涯学修支援課（担当：有田）
[TEL] 042-747-9017　[FAX] 042-747-9599
[E-mail] sagami-info@mail2.sagami-wu.ac.jp　[HP] https://www.sagami-wu.ac.jp/

学会・講演・出版物への掲載（2022 年度）

学会発表

学会名	発表タイトル	発表者	開催時期
日本LD学会第 31 回大会（京都）	大学と行政の連携・協働を通じたインクルーシブな生涯学習プログラムの開発２：共生社会の実現に向けて、当事者が主体となって地域に発信し、交流や仲間づくりを持続するために（自主シンポジウム）	日戸 由刈、武部 正明、狩野 晴子、他※1	2022 年 10 月

※1 抄録（次ページ）を参照

講演（講演中に本事業を紹介）

研修主催	講師	対象	開催時期
弘前大学大学院	川口信雄	大学院生	2022 年 7 月
キャリア発達支援研究会東北支部	川口信雄	教員（特別支援学校、小・中学校）	2022 年 7 月
厚木市立依知中学校	狩野晴子、他※2	教員（小・中学校）	2022 年 8 月
東京都自閉症協会	日戸由刈	保護者、当事者、支援者	2022 年 9 月
相模原市教育センター	川口信雄	教員（小・中学校）	2022 年 10 月
長野県総合教育センター	日戸由刈	教員（特別支援学校、小・中学校）	2022 年 11 月
山梨県立こころの発達総合支援センター	日戸由刈	保護者	2022 年 12 月
鎌倉市立深沢小学校	川口信雄	通級教室保護者	2022 年 12 月
鎌倉市立今泉小学校	川口信雄	通級教室保護者	2022 年 12 月
青森県立青森第二高等養護学校	川口信雄	教員（特別支援学校）	2023 年 1 月
相模原市立療育センター	川口信雄	保護者	2023 年 2 月
埼玉県立さいたま桜高等学園	川口信雄	教員（特別支援学校）	2023 年 2 月

※2 インクルーシブリサーチの頁を参照

出版物への掲載

種別	タイトル	著者	掲載書籍／時期
論文	知的障害の若者と大学生がともに学ぶインクルーシブ生涯学習プログラムの試み－コロナ禍における関係性支援の可能性と課題－	日戸由刈	臨床発達心理実践研究 17：p28-35／2022 年 7 月

大学と行政の連携･協働を通じたインクルーシブな生涯学習プログラムの開発･その2

:共生社会の実現に向けて、当事者が主体となって地域に発信し、交流や仲間づくりを持続するために

発表者：○日戸 由刈[1]、○武部 正明[2,7]、○狩野 晴子[1]、○岩本 健吾[3]、○今藤 孝拓[3]、○山根 美月[1]、○下斗米若菜[1,3]、○村上 理[4]　　指定討論者：○川口 信雄[5,7]、○藤野 博[6]

1. 相模女子大学人間社会学部、2. 山梨英和大学人間文化学部、3. インクルーシブ・プログラム開発参加協力者代表、4. 相模原市発達障害支援センター、5. （株）はまリハ、6. 東京学芸大学教職大学院、7. インクルーシブ・プログラム開発事業コーディネーター

【企画主旨】 日戸由刈（相模女子大学）

相模女子大学では相模原市と連携・協働のもと、2021 年度より文部科学省の事業委託を受けて、発達障害や知的障害の若者に対するインクルーシブな生涯学習のためのプログラム開発（インクルーシブ・プログラム開発事業）を行ってきた。「私たちが学びたいと思う大学」をテーマに、発達障害や知的障害の若者が学生、大学教員等が協働して先駆的な実践を行う施設（神戸大学 KUPI プログラム、社会福祉法人創思苑パンジーメディアなど）を視察した。そこで学んだことや考えたことを、発達障害や知的障害の若者と学生がともに議論し、成果報告会で発表を行った。

2022 年度は、1)他大学でも汎用可能な「インクルーシブ生涯学習プログラム（以下、生涯学習プログラム）」のモデル開発、および 2)プログラム運営に当事者の参加を図り、市内の知的障害や発達障害の高校生や若者に向けてプログラムの魅力を発信する技術や、活動を通じて参加者をサポートする心がまえを身につける「エンパワメント・プログラム」の実践、という 2 本柱で開発を進める。教員・コーディネーターの視点、当事者の視点、行政の視点から期待される効果と課題について報告する。なお本研究は相模女子大学の倫理審査委員会の承認を得た後、本人たちの同意を得て行っている。

【生涯学習プログラムの実際】 武部正明・岩本健吾・山根美月（同プログラム担当）

秋学期に行う全 8 回の生涯学習プログラムは、2021 年度までインクルーシブ・ゼミと称して開発してきた「ライフキャリア・ゼミナール（以下、ゼミ）」全 5 回を基盤とする。知的障害や発達障害の青年と学生 10 名程度を固定メンバーとし、自身の「トリセツ」を作成・発表して自己理解を深め、メンバー同士のゆるやかな紐帯を形成することが目的である。

生涯学習プログラムでは、一連の時間割の中に 2021 年度インクルーシブ・セミナーと称して開発してきた「オープン・セミナー」(以下、セミナー）を 4 回程度組み込む。セミナーの時間帯は一般市民も参加が可能であり、知的障害や発達障害のある高校生をターゲットにしている。OB/OG を含めたゼミ生もセミナーに参加し、講義の聴講だけでなく、「メンター」として外部から参加する発達障害や知的障害の後進、一般の若者・市民との交流機会を持つ。

加えて、本プログラムの目的や魅力を地域の発達障害や知的障害の高校生や若者に向けて You Tube などの媒体を用いて発信していく「メディア」活動も新たに開始する。プライバシー保護などメディア・リテラシーや記録・編集の技術、YouTube などの媒体への公開技術などの習得が必要であることから、専門技術スタッフによる指導の場を設けている。 成果について、メンターや学生ボランティアの立場から報告を行う。

【エンパワメント・プログラムの実際】 狩野晴子・今藤孝拓・下斗米若菜（同プログラム担当）

2022 年度のプログラム開発の二本目の柱として、当事者が主体となって共生社会の実現に向けた地域への発信や啓発、および発達障害や知的障害の若者と大学生がそれぞれの地域で仲間づくりを行うための持続可能な体制づくりを目指す「エンパワメント・プログラム」を開始した。このプログラムは、「メンター＆メディア活動」および「インクルーシブ・リサーチ」の二つの活動で構成されるが、ここでは 2021 年度から活動を行っている「インクルーシブ・リサーチ」に限定して活動の実際を報告する。

「インクルーシブ・リサーチ」は、これまで調査の対象であった発達障害や知的障害のある若者が、調査の主体となり自らの生活を豊かにするために課題を感じている事柄について、大学生、大学教員等と協働して調査研究を行う活動である。その過程を通して、自身の関心を探求するための調査方法や社会への発信の方法を学び、セルフ・アドボカシーが可能になることをねらいとしている。 2022 年度は、昨年度から活動している知的障害のある若者 4 名と本学の学生を活動の中心メンバーに据え、昨年度の課題として提示された「学校を卒業した後も学びを続ける」をテーマに、地域で行われている自主的な活動について調査を行い、グループ活動を運営するノウハウを学ぶ。この活動を通して、メンバー一人ひとりが、将来、自分の生活する地域で中心となってグループを立ち上げることができる力を身につけることが目標である。また、同じようなニーズを抱える若者・学生のサポートを目的に、高校生との交流も予定している。発表では、参加者の反応、手ごたえ、課題について、教員・メンター・学生それぞれが報告を行う。

【相模原市の取り組み】 村上 理（相模原市発達障害支援センター）

相模原市発達障害支援センター（以下、センター）は、2021 年度はプログラムの企画・運営にも参加する等、プログラム開発に直接関わってきた。その結果、相模女子大学との連携・協働により、大学のノウハウや資源を活用し、当事者が支援者と共に考え、やりたいことや必要な支援を自ら発信していく、「当事者の主体性を尊重する活動」のあり方の一つのモデルを提示することができた。また、プログラム開発に直接かかわる大学と行政の協働により、当事者の意見を市民サービスに反映させる基盤作りを行えた。一方で、行政機関の視点としては、本プログラムが市の特色となるような広く持続可能な取り組みとなるには、教育機関などとの地域連携やマンパワーの不足という課題があがっている。

2022 年度は、センターは本プログラムを地域に還元することを目的に、プログラム開発と並行して行われる連携協議会の運営を担っている。具体的な取り組みとして有識者、特別支援教育及びインクルーシブ教育に関わる教育機関の関係者、福祉部局や教育部局に代表される庁内関係機関を増員して連携協議会の構成員に迎える。加えて、プログラムに参加する当事者なども連携協議会の構成員に迎え、市政モニター制度を活用したアンケートを実施するなど、他大学でも汎用可能な「インクルーシブ生涯学習プログラム」のモデル開発にあわせて、地域における障害のある方の生涯学習や余暇のより良い在り方について議論の展開を図りながら、プログラムの普及に関して関係機関の具体的な連携体制も検討していきたい。連携協議会の実施状況および今後の課題について述べる。

おわりに

おわりに

相模女子大学　副学長　奥村裕司

昨年度に続き、相模原市と相模女子大学との連携・協働事業として、このインクルーシブ・プログラム開発事業に取り組めたことは、「共にささえ合い生きる社会」の実現を目標としている相模原市だけでなく「多様な学びの機会を提供し、開かれた大学」を目指す相模女子大学にとっても、これ以上に無い基盤形成の良い機会を頂いたと思っている。

昨年度の本事業における取り組みでは、「多様性と包摂（Diversity & Inclusion）」を基底とした大学における「生涯学習」の核となる考え方は提唱できたものの、知的障害や発達障害の若者に適した生涯学習プログラムの運営体制の整備・構築までには至らなかった。それゆえ、地域より求められるニーズを再探査し、「地域連携による障害者の生涯学習機会の拡大促進」に向けた本年度の取り組みは、昨年度の取り組みから見えてきた課題を解決し、そしてさらに一歩前へ進めるものであると感じている。本事業の成長を、ホップ・ステップ・ジャンプの３段階で例えるならば、今年度の取り組みは、まさしくステップの段階にあると言えるだろう。このステップの段階を充実させることこそが、これから先の大きなジャンプに繋がることを、今年度の「インクルーシブ生涯学習プログラム」のモデル開発や「エンパワーメント・プログラム」の実践研究を通じて共有できたのではないだろうか。「障害者の多様な学習」に関する取り組みが、単なる型通りのプログラム運営ではなく、障害者の「学びたい」を第一に考えた自由度の高いプログラム運営につながり、それが多くの人々に認知され、地域から社会全体へと広まることを切に願っている。

一方で、「生涯学習」のプログラム（カリキュラム）を充実させ、持続可能なものへと展開していくためには、運営に係る人員や資金の確保も欠かすことができない要件である。したがって、本プログラムをさらに発展・継続させるためには、この取り組みに携わるすべての方々が同じ思いを共有し、お互いをささえ合い、さらには地域の教育・福祉機関等とも有機的に連携し、推し進めていくことが最重要となるだろう。本事業運営にあたって組織した今年度の連携協議会においても、大学・行政の教職員のみならず、相模原市内の教育・福祉の関係者、有識者等の委員より、プログラム開発に資する多数の有用な意見が出された。この点を真摯に受け止め、今後に活用していきたい。障害者の「学びたい」を第一に考えた自由度の高いプログラム運営においては、講座を担当することができる専門知識をもった教員を有する大学が果たすべき責任は重いが、地域の教育・福祉関連機関といった資源を活かしながら本事業を展開することができれば、自ずと持続可能な運営体制がみえてくると信じている。そのための一層の努力を惜しまない所存である。

おわりに

相模原市こども･若者未来局長　杉野孝幸

日頃から、本市の発達障害者支援にご理解とご協力を賜り、誠にありがとうございます。

また、相模女子大学の皆さま、プログラム開発参加者の皆さま、そして貴重なご意見をいただきました関係者の皆さまのご尽力を賜りまして、昨年度に引き続き「インクルーシブ・プログラム開発事業」に取り組むことができました。お力添えを賜り、心より感謝申し上げます。

さて、発達障害につきましては、テレビや新聞など、マスコミでも取り上げられる機会が増え、今年度の市政モニターでは「知的障害や発達障害についての認知について」尋ねましたところ、９２パーセントの方が認知しているという結果となり、世の中の関心が高まってきている状況です。

このような状況のなか、障害の有無にかかわらず、誰もが能力や可能性を伸ばし、自立して社会参加することができるよう、障害の早期発見からその後の療育まで一貫した対応を進め、ライフステージに応じた切れ目のない支援が求められています。

本市では、発達障害支援に向けまして、療育センター陽光園、各区の子育て支援センターにおいて、より身近な地域で適切かつ必要な支援を受けられる体制づくりを構築し、関係機関と連携しながら、相談支援業務等に取り組んでいるところでございます。

この度、昨年度に引き続き、文部科学省から「学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業」を受託し、相模女子大学の皆さまやプログラム開発参加者の皆さまと共に「インクルーシブ・プログラム開発事業」に取り組み、生涯を通じた学びの楽しさに触れ、また、障害への理解促進を図る機会を持つことができました。この事業による生涯学習機会の提供は、障害者の学習意欲が尊重され、生きる勇気と自信を与えてくれる素晴らしい取組みであると認識しております。

本市といたしましても、今後も教育や福祉分野など、障害のある方の生涯学習機会の拡充に取り組む多様な主体の皆さまと連携・協働しながら、共に学び、生きる社会の実現に向けた施策を推進してまいりたいと考えております。本市の発達障害支援事業の更なる充実に向けまして、皆さまのご理解とご協力をお願い申し上げまして、報告にあたりましてのむすびとさせていただきます。

令和４年度（2022 年度）文部科学省委託事業
学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業
「地域連携による障害者の生涯学習機会の拡大促進」

行政と大学の連携・協働を通じたインクルーシブ生涯学習プログラムの開発
－当事者が主体となって地域に働きかけ、交流や仲間づくりを推進するために－

2023 年２月発行

相模原市発達障害支援センター
〒252-0226 神奈川県相模原市中央区陽光台 3-19-2　TEL 042-756-8411

相模女子大学
〒252-0383 神奈川県相模原市南区文京２丁目１番１号　TEL 042-742-1411（代）